偽ギル様のありふれない英雄譚

鼠色のネズミ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付けばＦａｔｅシリーズの顔、ギル様ことギルガメッシュになった「男」

偽物だけど、全力でなりきって何とか頑張るお話

下記でＴｗｉｔｔｅｒを開設致しました。「感想を送りたいけど運対かも！」って方はご利用下さい。

ｈｔｔｐｓ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／ｊＷｓｌｎＶｎ６Ｄ６ＹＯｆｔｋ

目次

王、誕生す　1
王、親友を得る　9
【幕間】兵器、星を詠む　18
王、来訪者を知る　28
王、謁見に赴く　37
王、勇者御一行と触れる　47
王、勇者にドン引きする　56
【幕間】オルクス大迷宮　65
【幕間】オルクス大迷宮②　72
王、策を練る　82
王、そしてオカン　90
王、そして愚者の行末　100
【幕間】奈落の底で　111
【幕間】奈落の底で②　123
奈落の化け物、或いは誰かの運命　134

王、誕生す

目覚めろと、何処からか声が聞こえた。
最初の記憶は暗い淵。生命と死の境界も曖昧な生暖かい水、水に揺れる草のように力も入れずに揺蕩う。
自我を手に入れると同時の――洪水
巻き起こる水の渦に体を任せ落ちていく感覚。不思議と危険は感じず、身を委ねると充足的な安寧感を得られた。そうして居ると突然、何の前触れも無く押し出される。
行けと、生まれるのだと
何者かが声を張り上げる。そしてそれに従うように
誕生を果たした。

世界が忽然と姿を消し、新しい形に受け入れられてから、決して短くは無い時間が流れた。
齢、未だ15にも関わらずの即位。前王の急没が理由なのだが若くして没した王は、俺一人のみの血筋を残してこの世を去ってしまった。
一般人が入る事など到底許されぬ王宮の最深部。金、銀、鉱類で彩色された部屋の内装を見渡して一息つくと同時に、深く腰掛けて布を取る。さらりとした金の髪が目元近くまで垂れ、それを振り払うように頭を左右に振った。

「王よ、御時間です」

不意に部屋の扉が開く、部屋の中に入る時は伺って欲しいと言うのは既に何度目か。大した感情も持たずに軽く咎め、蒼い双角をあしらった布を巻く。
前世を含めての初めての体験。それに心臓は早鐘を打つが落ち着

けと心を無理矢理に抑え付ける。

「王よ…御立派です。きっと先代様も一抹の不安も抱かないでしょう」

何時からか、自分の隣で世話を焼いていた麗しい見た目の麗人が目元を押さえる。彼女以外にも目を凝らせば様々な者が居るが、誰一人として悪感情を抱く事は無い。

俺はそれに気が付いているが声にも出さないし止める意味も無い。

「先代様も同じ物で…国を幾度も救い、導いてきたのです。

…不思議なものですね、まるで貴方様が最初の所有者の様にも見えてしまいます」

その言葉に返す言葉が見つからない為、俺はふん、と一つ鼻を鳴らした。

右手に籠めた黄金の篭手に、濃い青色の大きく開いた襟服。下には丹塗とも言うべき真紅の長ズボンに青いライン、大鷲を彷彿とさせる荘厳な両翼が後ろから覗く。

そして　頭部

捻るようにして巻かれた白布と蒼の双角とも言うべき奇妙な飾りに、総てを見透かすような赤目と綺羅びやかな金髪。

『賢王』ギルガメッシュ

それが今の俺だった。

その人物を見たのは一年や二年前では無い。きっかけは些細なテレビアニメ

「Ｆａｔｅ」

それこそがこの人物、「ギルガメッシュ」の舞台だった。彼の活躍を画面越しに見た俺はきっと酷く魅せられたに違いない。

無尽蔵の圧倒的な財宝に、人を惹き付けては止まないカリスマ。慢心に溢れたその余裕と一線を画する強さ。俺は瞬く間にこのキャラクターの虜となった。

勿論、彼の親友のエルキドゥも、天の女神のイシュタルも、冥界の女主人のエレシュキガルも、全員がとても魅力的で大好きだけれど、当人になりたいと願った事は無い。

理由は簡単で、自分には重すぎるから。

ギルガメッシュの活躍の裏には彼の並々ならぬ苦労や涙がある。そうであるのが物語だからだ。

時に友を喪い、時に創造神と敵対し、時に過労死までする。そんなロマン溢れる物語のキャラクター、しかし強大でも無敵と言う訳ではない。

「Ｆａｔｅ」シリーズにおいてのエンディングは完全なハッピーエンドが少なく、誰かが「別れ」もしくは「死」を辿るビターエンドが主流だ。それは見ている側からすれば深みを感じ、物語の余韻に思いを馳せる事が出来るから良いのだが自分が経験するとなれば話は別。冗談じゃない、あのギルガメッシュですらビターエンドなのに俺みたいな偽物だとバッドエンドまっしぐらだ。

偽物が本物に勝てない道理は無いと、Ｆａｔｅを代表する主人公は言ったがそれはあくまで洗練された偽物だけ。本物になろうと努力した偽物だけが本物に並ぶ事が許されるのであって、それがギルガメッシュであるのなら尚更だ。まだまだ自身の練度はあの「王」には届かないと強く悟る。

「〜〜エヒト様の御加護が〜〜」

即位の式典は着々と進む。今は教会の者が何か神の加護だとか祝福を唄うけれど俺は知っている。

――何れ、神とは決別しなければならないと

この世界の時代は、俺が知る物とはやや違っていた。

先ず文明が進んでいる。流石に現代日本とは言わないがメソポタミア文明よりは間違いなく進んだ時代だ。

二つ目に、神の存在。人類の九割が「エヒト」と言われる神を信仰している。本来であればウルクの都市神として女神イシュタルが祀られている筈なのだが。

このような違いを挙げればキリはなく、俺は諦めて一つの考えに辿り着いた。

――もしかして此処、平行世界じゃね？

と。

ウルクではない事にちょっと何処か残念感を覚えたものの、そうであるのなら常識をこの世界で養わなければならない。俺はこの世界について熱心に勉強していたが、やはり避けては通れないのが神の存在、「エヒト」である。

前世でティアマトとメソポタミア勢の戦いを視聴していた俺はめちゃくちゃに警戒して調べたが、不意に俺の目に見える景色が暴走した。

――自ら神を名乗る神性を帯びた人
――滅ぼす事に愉しみを覚え
――作り、壊され、また壊される。
――ただ、崇められるだけの悪神
――そして、何れはこの世界を――

この時に覚えた身の毛もよだつ嫌悪感と拒絶感は未だに忘れられない。

エヒトと言う者が神とすら呼べない、ただ只管に邪悪な諸悪の根源であるのだと理解した。

『全知なるや全能の星（シャ・ナクパ・イルム）』

ギルガメッシュの持つ宝具の名、この世界を星の光の如く照らす偉

業が、宝具へと押し上げられたモノ。それを可能にした千里眼は、現在から並行世界に至るまでの未来を見通す。
その眼には何故か過去が捉えられた。これ以来は過去の出来事を見ることは叶わなかった、様々な方法を試し見たがどうにも出来ない。
この世界で知れる事は未来のみ、確定した未来は未だに無い。この世界が「Ｆａｔｅ」の何かは知らないし、もしかしたら俺がプレイするより前に終わったイベントなのかもしれない。
だが俺は、偽者なりに――王となってみせようと思う。

「では、引き続いて新王に神の御加護を」

一人の初老の男が俺にそう言う。周りの視線が俺に傾き、注目が注がれる。
しかし俺は動かない。金で装飾されたフカフカ素材の玉座の上で薄ら笑いを浮かべて足を組む、物凄く恥ずかしいのだがきっと、ギルガメッシュだから絵にはなっているだろう。

「王よ、如何なされましたか？」

そう言う男の顔には俺を敬おうとする意思など見て取れない。むしろ動かない俺に対して内心で苛ついているのが見て取れる。周りの者達も何事かと顔を見合わせて少し煩くなる。

「要らん、我にその様な物は」

ざわめきが加速を始める。一人残らず動揺を顕にして何かを話している。

心の中では悪い事をしたのがバレて、これから怒られると確定している時のような圧迫感が胸に掛かっているが、全力でギル様の余裕笑いを思い浮かべて心を奮い立たせる。

「…何のつもりですか？」

「何もどうも無い。我にはエヒト神の加護を受け取る必要は無いと言っておるのだ」

信じられないと言わんばかりに目を見開いて俺に問う男。悪いな、神とヒトの袂を別つ為に俺が神に触れちゃダメだし、何かされるとも分からんのだ。

心をひたすら膨らませ、見下す。自分は王だ、自分こそが最上で自分の発する言葉こそが正論だ。滅茶苦茶な論理の暗示を自分に掛ける。

「そもそも何故この儀式が在るのか、貴様等は知っておるか？」

「無論です、ハイリヒ王国を治める権利を神より委託され…」

「それが要らんと言っておるのだ。

我が王権は父上から引き継ぎしモノ。神から受け取ったモノでは無く、我が生まれついた時から持っている。

我は産まれながらにして、王である」

自分でもボロが出そうな理論だと思う。もしも話し相手が「それって貴方の感想ですよね？」とか言う奴だったら負ける気しかしない。だから相手の思考を上手く回らせないように威圧感的なのを背中から放出しておく。

反論するならしてみろ、屁理屈でも何でも時間を稼いで時間切れにしてやる。

「…分かりました、では新王よりお言葉を」

「待て！何を言っている!?エヒト様の容認無しにそのような…」

「新王様、此方へ」

お、おう…スルースキル高いっすね公爵さん。

何か滅茶苦茶喚いてるけど無視して良いんかな、良いのか。

「待て！話はまだ…！」

「連れて行け、我の邪魔だ」

そう言って指パッチンをすると何処からか来た屈強な二人組みがずいずいと引っ張って行く。前世を含めて言ってみたかった言葉が言えて少しばかり良い気分になるが、一瞬で気を戻して気を引き締める。

何事も始めは肝心、これから俺が言う事は途轍もなく重要で国の指針を示す言葉。本音を言えば「エヒト」の悪性とか悪行を暴いてコメンテーターの如く滅茶苦茶な批判をしたいが、エヒトの信仰は一朝一夕の物ではない。

恐らく言った所で民から「何言ってんだコイツ」的な目で見られかねないし、最悪エヒトが乗り込んで来て直々にぶっ倒される可能性まである。

だから俺は――決して民の事を思慮しない。

――王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）

国中のあらゆる場所に黄金の波紋が開く。

本来であれば武器や金銀やらを放出するのだが、今回はその限りでは無く俺の声を聴かせる為。

国全体に余すこと無く俺の声を流すための手段。

『聞け！ハイリヒ王国に住まう民達よ！』

この日、俺が我になり
王となった。

王、親友を得る

「王よ！兵の一人が謎の高熱で倒れました！」
「王よ！座商が増え、トラブルが多発しております！」
「王よ！帝国から使者が訪れました、如何致しましょう！」
「王よ！夕食は魚料理でよろしいでしょうか！」

王に就任してから早い物で一年は経つ。
するべき事は多すぎて、過労死する気持ちが良く分かった。けれど原作のギルガメッシュはこれより遥かに多い仕事をこなしたのだから自分の未熟さを痛感した。
王になった「あの日」のスピーチは大成功で、正直言って暴君レベルでヤバい事話した記憶がある。
「我に全てを捧げよ」とか「貴様等を導いてやる」とか…もう完全なブラックヒストリーになろうかとしている記憶。もしもこれが「ギルガメッシュ」以外の体で話していれば民から見捨てられる事待ったなしだが、ギルガメッシュには不正レベルで他者を懐柔する力があった。

カリスマ【Ａ＋】

ギルガメッシュが持つスキルの一つで、Ｂ以上あれば国を治めるに十分な数値というのが公式の説明だ。
では、Ａ＋ともなればどうなるのか？
Ｆａｔｅシリーズの顔とも言えるセイバーこと、アルトリア・ペンドラゴンはＢのカリスマスキルを持っている。分かるだろうか？彼の高名なアーサー王でもＢという数値なのだ。それ以上となればどうなるのか、公式では「呪い」レベルで人を率いる才能を持つと言われている「カリスマ」のスキル。
その肉声を国民全員が聞くとどうなるか？
結論は今、驚きと安心の支持率１００％である。この一年間で大きなやらかしこそ無かったが、一つや二つくらいはミスをしてしまっ

た。にも関わらず、支持率は下降の一片も見せない。
ぶっちゃけ俺がこれから公衆の面前でどじょうすくいを始めだしても許されるまである。本当に恐ろしいスキルだ。

「その熱を出した兵は隔離せよ、同じくして接触をした者もだ。感染症の可能性が有る。
座商は喧嘩両成敗だ。状況を見て判断し善悪の区別が付かぬなら罰金を双方から取れ。
使者は手厚く饗せ、用件だけを聞き都合の良い時間を改めよ。
夕食は何でも良い。もう何度もしたぞこのやり取り」

「「「かしこまりました!!」」」

どたどたと、我の前から人が過ぎ去り少しだけ静かになる。僅かに流れた額の汗を腕で拭って一息つく。
ふと宮殿の中から外を見れば既に日が傾いている。実はを言えば我はどうしても言えない悩みを抱えていたりします。
それは…
親友(エルキドゥ)が来ない！

という事である。
何を些細な、と思われるかもしれないが此方側からすれば死活問題だ。
この世界、多分Ｆａｔｅシリーズの何処かだけれど、もしかしてエルキドゥや他のサーヴァントにも出会えないのかと、平行世界の自分を見てみた結果。普通に居た。
ある平行世界ではエルキドゥと性能を競い合い、イシュタル様エレ様の板挟みにされている。
羨ましい。聞こえるまで何度だって言おう、羨ましい。だって皆強いからエヒトの方からビビって来てないし、何よりメソポタミア勢大

集合じゃないか。
……やはり暴君にならないと駄目か!?
エルキドゥはギルガメッシュの親友だが、生まれつき一緒と言う訳では無い。
王になった当初は暴君であったギルガメッシュを戒める為の役割を持って泥から生まれた「兵器」だ。
泥から生まれた素朴な兵器と、神と王の血を引いた黄金の王。その対比が相まってこの二人の友情は絶大な支持を得ている。
話を戻すが、つまりエルキドゥはギルガメッシュが暴君だから生まれたのだ。一方我は?普通に政治して国を治めてます、エルキドゥが来る理由がありません。
納得が行かない。何故暴君になった我にエルキドゥが来て真面目な我の方には来ないのか。世界というのは時々酷い贔屓をする。
もう今からでも暴君になってしまおうか…いや、でもそれじゃあ民に迷惑が掛かるし…

「王よ、何を唸っておるのですか?」

そう言って我の部屋に何の断りも入れずに入ってきたのは、俺の側付きであるシドゥリ。
ＦＧＯでの第七特異点で初登場し、その不憫過ぎる最期から皆のトラウマとも呼ばれる美しい褐色の女性。ちなみに我が王になった日に言葉を掛けてくれていたのも彼女だ。

「んん…何でも無い。ただこの国の事を考えていたまでよ」
「まあ…!流石は王です、本日の職務を終えてもこの国を想われるとは!」
「フハハハハ!そう褒めるで無いわ、シドゥリ」

ここ一年で全力で練習した高笑いを披露しながらシドゥリと話す。
ぶっちゃけ言ってシドゥリが居なかったら我は大分早く限界が来

ていたと思う。話すと基本的に全肯定してくれるし、包容力と言うか年上のお姉さん感がヤバい。めちゃくちゃ有能だし本当、人を駄目にする為に生まれてきたのでは無いかと思う程だ。
英霊では無いとは言え、彼女も素晴らしい人材。我の仕事の多くを肩代わりしてくれる有能オブ有能。
両手にバランス良く持った石版がドサドサと我の前に落ちる。羊皮紙も有るのだが雰囲気は大事。

「明日の分です、此方に置いておきます」
「お、おう…」

決して王とＯｈを掛けたギャグでは無い。
ただ終わりなき雑務の戦いを目の当たりにして、それしか言えなかったのだ。
はぁ、と誰にも聞こえない程の大きさで溜息をつく。玉座から体を起こせば全身の骨が軋み、固まった形が崩れていくのを感じる。

「王よ！ご報告致します！」
「戯け！ノックをせぬか！」

どうやら我の仕事は残業の様だ。

「も、申し訳ありません…緊急でしたので…」
「疾く報告せよ、場合によっては不問にする」
「はっ……実は――」

ハイリヒ王国、南郊外の森。
時刻は既に深夜付近となっており、森の中では獣の呻き声一つ聞こえない。何処と無く不気味な雰囲気を纏う森を我は歩く。ふと空を

見れば太陽も月も空には浮かんで見えない。星の粒がただ砂金のように煌めいている。
一歩一歩を踏み出す度に、自分の体が震えてはいなかと心配になる。森を案内してくれている騎士の為にも情けない姿を見せたくない…いや、ギルガメッシュの情けない姿を見せたくないのだ。

「この先か？」
「はい、今は騎士達が足止めをしております…」

――正体不明の魔物が現れました！
その声を聞いた時、我は何を感じたか。
不安、恐怖、高揚、歓喜、全てを混ぜ合わせた様な意味も分からぬ気持ち。
その感情の正体は未だ不明。森の中を彷徨くに連れて薄れていった。

「王よ！アレです！あの魔物が…！」

突然、それは現れた。
体に纏う暴力的なまでの生命力
切り倒した木株の年輪の様な模様
樹木をそのまま生やしたのと何ら変わらない双角

「■■■■――!!」

魔物とは、一線を画した狂犬
それが我の脅威として現れた。

「……貴様に告げる、騎士を連れて即刻戻れ」
「っ!?王よ、我等は貴方様に…」
「戯け、貴様等にあの化け物の相手が務まるとでも言うか。

我の足枷と為るでない、貴様等を庇い戦う気もせんわ」
「……かしこまりました……ご武運を！」

多くの者が我の前から姿を消す。
息をせぬ者、腕を曲げた者、血に塗れて今世と来世の間に粘る者。
多くの者が我の目の前で傷を負い、失われた命も有る。

「■■■■――!!」

そして目の前の凶獣、「兵器」と呼ぶに相応しいヤツは標的を定めず、我に襲い掛かる。
不意に、時が止まる。そんな錯覚を覚えると同時に心の淵底から先程の感情が再び巻き上がる。
不安、自身の力が通じるかの不安
恐怖、まだ姿も見えぬ正体不明の魔獣への恐怖
高揚、どれだけ力を振るおうと咎められない高揚
そして――歓喜、漸く全力を出せる相手との邂逅に沸かぬ筈が無い

『『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』』

十を超える黄金の扉が開き、剣、槍、魔術が姿を現す。並々ならぬ光煌を放つそれらは決して多くは存在しないモノ。市場に売れば真面目に働くことも馬鹿らしくなる大金が転がり込むような宝物。
それらが――凶獣に牙を剥く。

「■■■!!」

途端、咆哮。
地を揺らし大地を崩す意味を成さない叫び。
その叫びに呼応するように土塊が蠢き、形を作り出していく。一つは剣、一つは槍、一つは形も無き力の奔流。全てが空中でぶつかり合

い、金銀の業物は土塊の武具に相殺された。
おのれ、と小さく悪態を吐く。
『王の財宝』に収められた武具や道具の中には、並やそれ以下のモノは存在しない。
ギルガメッシュが持ち得る得物の一つ一つは超越の領域に踏み込んだ、強くも美しく儚いモノ。この世の総てを知り、覗き、自身のモノとした功績から生まれた宝具。その名が『王の財宝』
故に、放たれた武具は一つ一つが、唯一無二の宝具だった。
にも関わらず、この凶獣はそれら全てを打ち返してみせた。
規格外、その言葉が相応しい。
ギルガメッシュを人と神の王と言うなればこの獣は自然の王。
両者に共通する事と言えば、互いに強者である事だけ。それ以外は鏡に映したかの如く真逆の一人と一匹。

「雑種が、我が宝物を土塊で防ぐか」
「■■■■■――！」
「まあ良いわ――次は倍行くぞ」

しかし強者と強者の決闘は一朝一夕では終わらない。
陽が昇り、両者の戦いは加速し――次のラウンドへと至る。

二日目
剣の全てが凶獣に打ち込まれた。
破滅の黎明が、初めて担い手を選んだ剣が、空間を捩じ切る剣が。
しかし凶獣に起きた変化と言えば右腕を切り落としただけだった。

三日目
今回打ち込まれたのは全ての槍。
オーディンの主槍　が、　五つに別れた勝利を齎す槍　が、
クランの番犬の愛槍までもが。
今度は化け物の左腕を奪った。

四日目
流石に疲れ、黄金(ヴィ)の空飛(マー)ぶ船(ナ)から多くの宝具を放つに終わった。
何時の間にか、化け物の両腕は復活したがヒトの物となっていた。

五日目
宝物庫にあるモノを無差別に放った。
万象無(ウトナ)に帰(ピシュ)す海嘯(ティム)が大波を上げ、災禍(レー)なる太陽(ヴァテ)が如(イ)き剣(ン)が炎を吐き出し、永久(ヘル)に熱知(ヘイ)らぬ地獄(ヘム)が空間ごと凍らせ、辺りには立つ事も出来ぬ宝具の墓標が立っていた。
獣は両足を喪い、ヒトの物へと変えた。

六日目
ついに宝物庫から一振りの剣が抜かれる。
その名を乖離剣エア、ギルガメッシュが宝物庫の中で「担い手」である数少ない宝具。
天地開闢を成した最古の武具は醜い獣の頭部を吹き飛ばし、麗しい緑のヒトのモノに変えた。

そして――今
獣は居なかった。残るは意味も無く暴れ回る、緑の美しいヒトだけ。遂には武具の尽きた宝物庫から取り出されたのは歪な形をした布製の作り物の心臓。
偽(ティ)りの桃(ンズ)布(ハー)心(ト)

多くに親しまれる童謡、「オズの魔法使い」その中で心を持たないブリキ人形が手に入れたモノである。
心を持ちたいと願った彼の願いは、心を得る事では無く冒険の中で生まれた。そして旅路の果てに大魔法使いオズが彼に与えた、柔い布の偽りの気高い心臓。

「■■■■■■――!?」
「さあ…心を得よ！今こそ我が親友（とも）となるのだ！」

其奴は声を上げる。拒絶とも、否定とも、何にでも捉える事の出来る生命の奔流を擬声化したモノ。

何でも良い……その声が何を意味していようが……！

「我と……共に歩めと言っておるのだぁぁ!!」
「■■■■■しゅ…」

偽りの心臓が完全に埋まった途端、「それ」は確かに顔を綻ばせて笑った。

ただ、無邪気に純粋に、友を得たのだと、そう言っている気がした。

「それ」の意識は長くは持たずに暗転する。体から全ての力が抜け落ち、倒れてしまう。

しかしそれは我も全くの同じで、剣を背もたれに「それ」の側へと座り込む。

須臾の後、見守っていた風は漸くこの場を去った。

【幕間】兵器、星を詠む

何の前触れも無く、■は生まれた。
何も感じず、ただ■は命を持って立っているのだと理解った。
手も足も図体もヒトでは無く、ただ破壊する為だけに作られたモノ。名もなければ心も持ち得ない。
そのくせして生まれついてから得た物は何もなく、有るのは作られた五体。誰かの意思で誕生を果たした命ある泥人形。
誕生を果たした途端に流れ込む――創造主の思考
自身を拒絶した人の王、その保険。
人族が発展し過ぎぬ為の
万が一自身の本性が暴かれた時の為の破壊装置。
それが■なのだと瞬時に理解った。

「何故話さん!?貴様には知性が無いのか!?」

創造主は僕を見てそう言った。申し訳が無いけれどこの言葉はその時に理解できなかった。
あるのは君から貰った体だけ、■は君が望んだ通りだけど力以外は何も持って生まれられなかったんだ。

「知性も無い者に使徒など出来るかっ……!この失敗作が!」

創造主は■を失敗作と呼んだ。
途端――脳に走る言葉
壊せ
簡略的な唯一つの命令
壊す?何を?どうすれば良い?
試しに足で創造主の隣を侍るヤツを踏み潰した。驚愕に顔を染めたまま、ソイツは「壊れる」
なるほど、これが「壊す」と言う事か

「■■■■――!!」

やったと、創造主に報告の声を上げる。■の声は分からないとは言え、きっと命に従った事は分かるだろう。

しかし、創造主の感情は――憤怒

何故？分からない、■は命令に従っただけなのに。どうして主は怒るのだろう？

再び命令が下る。全く同じ「壊せ」と言う命令

「■■■■■――!!」

壊す、壊す、壊す

両足両腕を全力で振り回し、大木の如き双角で目の前に有る物を全て。

■の同類が、意思を持った仲間が■によって「壊される」

創造主は何故そんなにも怒りの声を上げるのだろう？命じたのは君自身だと言うのに

「■■■■■――!!」

命令は止まず変わらない、ならば■は命令に従うだけだ。

多くの同類が■に纏わり付く。構わない。叩き潰して、踏みつけにして、一つ残らず壊す。

剣や槍や魔術が■の肌を裂こうとする、同じ創造主から生まれた武具。傷付けられる道理は十分に有る。無我夢中で泥から武器を創造した。

「ッ！アルヴ！コイツを――落とせ！」

剣が■を裂く、槍が何本も突き刺さって鎖が何十に■を雁字搦めに

する。
力が、魔力が、抜け落ちて行くように感じる。それでも命令に逆らうことは出来ず、鎖をも破壊しようと喚く。
壊せと言う命令が下ったまま、創造主は何かを言う。土塊の剣が創造主の右腕を掠め、隣の男の右足を刎ね飛ばした。壊す命令は未だに続いている。
それなのに…■は――地へと落ちていった。

声が聞こえる。
鳥が、植物が、人が、生命が謳う声。
小さく儚くとも確かに温かなそれは、酷く優しいと思った。角に小鳥が止まる、足元に狗が寝そべる。
脳を甲走る破壊衝動は鳴りを潜め、呆然と意思ではなく本能で生物達を愛でた。道具であろうが兵器であろうが、意思を持たずとも生きている上で、本能は必ず消えはしないモノなのだ。

「■■■……」
比較的に穏やかな時が動く。■は生き物の巣の様に、母の様に、創造主から切り離された森の中で過ごした。
傷を癒やす様に、失った力を取り戻すように、大地と共に呼吸する。
兵器である■に食事は要らない。生命としての活動は空気中に漂う僅かな魔力で十分事足りた。
壊せ、その耳鳴りが響く迄は。

「■■■■――!!」

壊す、壊す、壊す、生きていても死んでいても関係なく壊す。
無機物も有機物も区別なく壊す、ただ意思も感情もなく命令に従っ

て砕き続ける。それが自身が産まれた理由なのだから。傷も不調も関係ない。■は兵器なのだから使い潰されて当然だ。
安寧は一刻にも満たなかった。
体の右が裂かれた。新しい二足歩行の生物が自分に鉄を突き立てる。智慧を持った霊長類、人という名を持ったそれだけ。壊す事の障害には成り得ない。
多くの人が■を取り囲むようにして、鉄の武器を必死に振り回す。しかし無意味なのだと
一人、踏み潰した
一人、弾き飛ばした
一人、刺し貫いた
確実に人が破壊されていく、■を止める術は無い人々。
鈍らな鉄の塊は幾度も自分の体に突き立てられるが、止まる要因には成らない。
途端、金の武具が飛来した
肉を裂かれる感覚、確実に神経を走る不快感
その感覚に気を悪くしては一際声を張り上げて啼く。

「ふん、雑種風情が一丁前に吼えるでは無いか」

金色の武具を放ったと思われる者は、惜しがる素振りも見せずにその姿を現す。黄金の甲冑に黄金の髪、そして液体の金の中に二粒落としたかのような紅の目。後に嫌という程見て、嫌という程美しいと感じる事になる顔。
体から溢れ出る気色や雰囲気はただの霊長類では無い。生物として、人として頂点に君臨する「王」。
それが彼の印象だった。飛来する武具は数をどんどんと増やし、■の至る所へ突き刺さる。
土塊から作り出した武器で黄金を相殺するが、一つの槍が捌けずに互いに突き刺さろうとする。
王はその槍を別の槍で弾いた。

土塊の槍は真紅の三叉槍に弾かれ、地に突き刺さった刹那に形を取らぬ土くれに戻る。
■は避けようと躰を翻したが、如何せん図体が巨大なので横腹に刺さる。

「■■■――!?」

その直後に起きる驚愕の啼き声。
自身に例えその槍が刺さろうとも問題は無いと、何処か■は余裕を持っていた。しかしその余裕が覆されたのだ。
黄金の飛来した槍は躰を揺り動かして引き抜く、途端に目に映ったのは夥しい出血。
その槍に籠められた術の一つかと最初こそ思ったが、思えばコレより高位の剣で斬り付けられた時には皮膚も裂けなかった。
それは創造主が付けた傷だった。
創造主が斬り、貫き、絡め取ったこの体には、弱点と言う物が浮き彫りになっている。
創造主が触れた場所はこの体の分厚い皮膚の装甲が剥がれ、触れただけで筆舌し難い痛みを伴うようになっていた。
武具が飛来する。何とか相殺する。
そのやり取りは何日も続いた。
王は様々な武器を持っていた。その一つ一つは、誰もが喉から手を出して欲しがるようなモノにも関わらず、使い捨てられる様にこの体に投げ付けられる。
世界を始原に戻すような海嘯や、炎を吹き出す剣、熱という概念を知る事の無い空間。
どれもが目を見開く様な、素晴らしく有り得ない武器だ、そして最後には一つの剣が抜かれる。

「目覚めるが良い――エアよ」

螺旋塔の様に、三つの大小が違う円柱が重なった武具。剣と呼ぶには刃がなく、槍と呼ぶには短すぎて、弓とは外見が掛け離れすぎていた。

力が収束を始める。剣を中心として

空気中の粒子が吹き荒れ、王の右手に携える剣に集まっていく。目も開けられない様な力の奔流、まだ振り下ろされもしない発動の前夜に植物が根から打ち倒れて行く。

「我が至高の剣を敬拝する栄誉をくれてやろう」

その声を起点に、蓄えられた力の奔流が解き放たれる。

視界が赤に染まる。たったの一振りで作られた力場、其処に■の頭は捕らえられていた。

根本から頸が折れて行く音、図体が大きくとも意味はない。この王を壊すにはもっと軽量化して……表面積を小さくすれば……

壊すにはどうすれば良いかに対する本能的な変化。

頭がヒトのモノへと変化し、手足五体もそれに応じる。

その姿のまま、王に向かう途中

時が止まったような錯覚を覚えた。

辺りはゆっくりとした速度で動く。

戦いの余波で舞う葉も、王の体から滴る血も、自分自身が振り上げた拳すらもが遅い。

王はあっさりと後ろへ跳び、拳を避ける。そして取り出された歪な心臓を模した布地、それが無防備な躰の胸に刺さる。

「■■■■――!?」

叫ぶ、そうせずにはいられない。

頭を、躰を走る膨大な情報量。喜び、悲しみ、怒り、一口に言えない複雑なモノ。感情と名付けられるそれが■の……僕の中に走っていく。

人は何故喜び、悲しみ、怒るのか、その理由が多く多く絶えずに流れ、注ぎ込まれた。
そして――入り込む王の記憶

王は人と神の血を引き、世を治める為に産まれた。
生まれついた時から、王であらねばならないと、自分を戒め育っていく。
そして知る――神の正体
神と人を分断せねばならない。その大命を誰にも知られる事なく抱え、人を導く
産まれして得た、莫大な力。
王は、本当の意味で孤独だった

その記憶に、僕は憐れまずには要られなかった。
君から貰った感情と、思考で、一丁前にそう同情する。
君は、多くに慕われて多くに頼りにされて……
終わろうとしている、それでも戦いの最中だと理解っている。
なのに、僕は彼の事を想わずにはいられなかった。

場面が移り変わる。
■は僕となっていて、樹木が一片たりとも存在しない人工的な場所。王の宮殿だ。
僕にはエルキドゥと言う名が与えられ、王（ギルガメッシュ）の元で暮らしているでも僕は、どうしてギルガメッシュが此処まで僕を大事にしてくれるのか分からなかった。
「どうした?・エルキドゥ、何を悩んでおる」
毅然とした態度のまま、ギルガメッシュが僕の側に座る。

黄金の髪が揺れ、紅い瞳が僕を覗き込む。既に時刻は深い夜となっていて、僕の部屋には僅かなオレンジ色の蝋燭が一つ揺れているだけ。

何の前触れも無くやってきた彼だけど、それが彼の人間性だと既に分かっている。

「君は、何で僕に良くしてくれるんだい？」

「ほう？と言うと？」

彼はまるで僕の言ってる事が分かんないみたいに興味を浮かべた。

「君に迷惑を掛けて、君の大事な国の人を殺して、そして僕は君の大嫌いな神が生んだんだよ。君を殺すために産まれた兵器なんだよ。君に恨まれはすれど、良くされる理由なんて無いだろう？」

一息にそう言うと、何だか口が乾いて水が欲しくなった。

前までは魔法で水を出して飲んでいたけれど、彼に見られた後に怒られて今はしていない。彼が言うには室内での歩き飲み食いは駄目なんだと言う。

「戯け」

「あうっ」

そんな中身のない思考をしていると、彼が突然人差し指で僕を小突いた。

反射的に意味を持たない言葉を発する自分に、変な人間らしさを感じて可笑しな気持ちになる。

「良いか？エルキドゥ、我は貴様に良くしている覚えは無い」

「でも……僕に名前をくれたり心をくれたじゃないか」

「戯け、名が無いと呼べぬし、心は我に要らぬモノだからな」

そう言って彼は黄金の波紋の中から一つの盃を取り出して一口含んだ。
甘酸っぱい柑橘類を主体とした芳醇な香りに、唾液が急激に作られていくのを感じる。
そう言う彼からは、僅かな嘘が見える。
僕に剣じゃなくて、優しい目線を向けてくれて
僕に槍じゃなくて、優しい手を差し出してくれて
僕に弓矢じゃない、優しい言葉を投げてくれた。
そんな事をしてくれるのに、良くしないなんて無理が有るよ。

「それになエルキドゥ、お前は兵器では無い。自ら善悪を考え、良し悪しを自分で持つ。それを我等は人と呼び、人と人との間で共に歩む者の事を――親友(とも)と呼ぶのだ、エルキドゥよ」

親友と呼ぶのか、この僕を
君から何もかもを貰っておいて、あまつさえ君に何も出来ない僕を共に歩む者と。
やっぱり君は――

「ギル」
「何だ？エルキドゥよ」
「君は――星みたいな人だ」
「……それは褒め言葉と取って良いのか？」
「勿論だよ、僕の精一杯のね」

星

「星の数ほど」と言う形容詞が有るように、数えても数えても尽きないモノ。
一つ一つに違う明るさ、色を持って空を飾る。暗闇に響くような一等星も、一見して無くても変わらない六等星も、全部全部、君に良く

似ているんだ。
空を飾る星は全てが全て美しく、一つ無くとも誰も咎めないけれど、決して手は届かない。
そして――旅人は道に迷わない様に星に名前を付けた。
時を経ても、場所が変わっても、決して動かずに誰かを導く星。
人は――それを北極星と呼ぶ。

王、来訪者を知る

揺れている。
ぐわんぐわんと、波を打つように上下左右に激しく揺れている。
地震かと思い、逃げようと思ったのだが体が重い。まるで重石を括り付けられたかのように身動きが取れない。
体を嫌な汗が覆い尽くし、不快感が動揺に混ざる。何が起きているのだと頭を悩ませた途端に、声が聞こえる。

「起きろ～！ギル～！今日はピクニックの日だぞ～！」

男とも女とも付かない中性的な美しい声。甘さと爽やかさをしつこくない位に混ぜた、形容の難しい温かい香り。
ぼやけた意識が覚醒し、我に抱き着きながらベッドを揺らす緑髪の人が見える。
……もしかしなくてもエルキドゥだ。

「あっ、起きたんだねギル。」

そう言って無邪気に笑う親友にほんの少しだけ可愛いと言う感情を抱く。
しっかりしろ我、此奴は無性だぞ……あれ、有り寄りの有りでは？
まあ嘘だが、そんな馬鹿げた茶番的な思考を持ちながら体を起こす。
今日は、何年ぶりかの休日だ。
ギルガメッシュの体となってから、幼少期以来の完全な丸一日の休日。勿論、なにか緊急の事が有れば休日は返上だが、大抵の事はシドゥリが正しい判断をしてくれる。
だから、もしも休みが潰れるとするのならエルキドゥみたいなのが再来する事くらいだ。
その事をエルキドゥに話した時に、エルキドゥがピクニックに行き

たいと言い出したので、前から約束したのだ。
どうやら遅く起きてしまった様で、エルキドゥが起こしに来てくれた。

「すまんな、我とした事が」
「構わないよ、僕も少し早起きしすぎたみたいだ」

そう言って伸し掛かったエルキドゥが横に避けて、体が幾分か楽になる。
生前は寝っ転がる事にすら憧れていたベッドから起き上がり、伸びを一つする。無駄に豪華な天蓋を掻き分けて我は絶句した。
まだ陽も昇っていない時間帯だった。
懐かしい記憶で、清少納言が言っていた「春は曙」の丁度曙の時間帯。民達の家では早起きな商店の人々も恐ろしい程少ない。
……恐らく時間帯は4～5時と言った所か

「エルキドゥ、我に何か言うことは無いか？」
「あっ……おはよう、ギル」

違う、そうじゃない。挨拶は確かに大切だけどそうじゃなくて。
そう言おうとすると、エルキドゥが我のベッドにもぞもぞと入り込んで……何してる？

「はぁ…はぁ…ギルの匂い…」
「今度から部屋に鍵掛けるぞ」
「扉を壊せば良いんだね？分かるとも」

そんな軽口を叩き合うと、コイツも遠慮がなくなって来たなぁと思う。
宮殿に来て最初の方こそ、遠慮してご飯も食べなかったりしてたのに、今じゃ大分自由奔放になっている。これが元来の性格なら好まし

いが。

「ごめんよ、そう言うのは冗談でね。僕のよりギルのベッドの方が大きい気がして」

「そうか？同じ物だと思うが」

「い～や、絶対大きいよ。僕のヤツこのスペース無いもん」

そんな意味のない会話をしていると、次第に部屋の中が明るくなってきた。何時の間にか日は昇り、小さいながら日の光が差し込んでいる。

我のベッドに頭を突っ込んだ体勢のエルキドゥを引き摺り出して、着替える為に部屋から少しの間追い出す。「僕は気にしないよ」じゃなくて、我が気にする。

結局、我とエルキドゥはギリギリ人が起き出す時刻に出発した。

「すやぁ……」

「うむ、絶対こうなると思っていたぞ」

宮殿で飼っている中で、最も靭やかで美しい白銀色の馬。その上でエルキドゥはしがみつく様に眠っている。

あんなにも早起きするから眠いだろうなぁ。と思っていたら案の定と言うべきか、すっかりと眠ってしまっていた。馬の上は快適という事は無く、ただ座っているだけでも振動が来て体力を使うのだが、エルキドゥを思ってか馬は平らな道を選んでいる様だ。

我はエルキドゥが起きない事にはどうしようも無いので、馬を手で引いて歩く。

気分は張り切って家族サービスをした父親が、行きの車で眠っている家族を見ている気分だ。

興味を強く含んだ民達を残して景色は少しずつ、しかし確実に移り変わっていく。
そんな光景は長々と続くが、数時間で人はだんだんと減って、遂に我達を見つめる人は居なくなって木々が人の代わりに我達二人を見つめる。
ピクニックに行きたいと言い出した本人は、未だに目を覚まさないが、開放的な空気を吸っていると来て良かったと思う。ミスが許されない職場でギリギリに生きていると尚更だ。

「もう良いぞ、大儀であった」

馬からエルキドゥを下ろし、馬にそう言って宝物庫内に導き入れる。
人の言葉を馬は知る事が出来ないが、王の言葉も感じ取れぬ程、この馬も愚かでは無かった。
エルキドゥを抱え、宝物庫の中からシートを取り出して地面に敷く。そしてその上にエルキドゥを寝かせる。
暇なので森の中を適当に散策する。濃い土のにおいや、葉を踏み付ける乾いた音を楽しみながら歩いていると緑色の髪がみょんみょんと、動いているのが見えた。何時の間にか一周してしまった様だ。

「起きていたか、エルキドゥ」
「ギル!?駄目だよ、もう少しどっか行ってて!」

エルキドゥが起きていたなら、そろそろ弁当でも開こうと思っていたが、何かタイミングが悪かった様で戻るのを拒否られる。しかし悲しいかな、この付近は殆ど歩いた。
手持ち無沙汰とはこの様な事を言うのだろうか。
あまりにも暇なので宝物庫に適当に手を入れて色々と出してみる。
『王の財宝(ゲート・オブ・バビロン)』と呼ばれるギルガメッシュの宝具は、殆どの財宝や宝具を収納する能力が有る。

公式では、宝物庫からモノを取り出す時は、何を取り出すかを明確にイメージする必要があるし、ギルガメッシュ自身も完全には中身を把握していないと言う。
だから取り出す時には前世の記憶にある、宝具の姿を思い起こしているのだが……

「マジか……普通に出たぞ」

素の口調が出る程驚き、思わずそう呟いて出したモノを見る。
名前がうろ覚えの船の宝具。モーターボートみたいな近代のモノではない、帆船。確か本当にちょっとだけ使ったサーヴァントの宝具だった。
とは言え、移動手段としてはヴィマーナが有るので恐らく死蔵される事になるが、割と出るものは出るんだと分かった。
こんな立派な帆船を死蔵するのも惜しい気はするが、物理法則を無視した飛行が出来るヴィマーナが優れすぎているのであって、船が劣っている訳では無い。

「そろそろ良(よ)いか」

そう思って再び、エルキドゥの元へと戻る。
船を宝物庫内に押し込み、歩き出すと考えるのは不思議と執務の事ばかり。そんな自分が少しだけ可笑しく、まるでワーカーホリックだと自嘲する。
大して舗装もされていない原始的な道が、酷く雰囲気的で心を落ち着かせる。

「エルキドゥ、良いか？」
「あっ、ギル今度は遅いよ」

エルキドゥの緑色の髪は少し乱れていて、額が僅かに湿っている。

何かをして汗をかいた様だ。
森の中とエルキドゥと言うのは酷く絵になる。近付けば飛び立ってしまう小鳥がエルキドゥの肩の淵に立ち、ふわふわとした触り心地のリスが足元で丸くなっていた。

「じゃあギルに問題ね、僕は何をしてたと思う？」
「それまた急だな…暫し待て」
「残念！惜しいね、ギル」
「まだ何も言ってないが」

答えさせる気のないエルキドゥの八百長問題を非難し、隣に座った。
我が居ない間に何が有ったかは知らないが、エルキドゥは上機嫌な様子で我の目の前に近付くと両手を広げた。

「プレゼントだよ、花の王冠！」

エルキドゥが我に差し出したのは、野花が規則無く、葉が輪っかの形を取った被り物。所謂花冠だ。
良く良く見れば形は結構歪つで、我の手に渡った時に花が落ちそうにもなった。器用な者が見れば、良い出来とは言わないだろう。それでもエルキドゥの誇らしげな顔を見ていると、あまり出来の事は気にならなくなる。

「良く出来ている、器用なのだな。エルキドゥ」

お世辞が何割か入ってるのは、百も承知だ。
だが友が作ったモノに対して出来栄えを求めるのは違うだろう。作って貰ったと言う事が大事なのだ。
穏やかな時間が流れる。リスを撫ぜたり鳥に菓子を分けたりして、精神的な疲労がだんだんと和らいでいく。

ギルガメッシュになってから数年、もしかしなくとも最も楽しい時間だ。

『王よ、御耳に入れたい事が』

だから、突然の伝達は嫌なのだ。

シドゥリの連絡用に開けていた王の財宝から声が響く。少しビックリして、エルキドゥとその場で１０センチ程飛び上がる。

『何事だ、大筋で良い』

『はい、畏まりました』

連絡を寄越したシドゥリ。

余程の事で無ければ処理してくれると言っていたので、恐らくその「余程」が起きてしまったのだろうか。

声は逼迫している様子がないが、シドゥリが動揺を悟らせない様にしているのかもしれない。

『先程、神託が下りました。内容は魔人族と人間間の戦争、それの勝利の為にこの星より上位の世界から多くを喚ぶと言うものです』

『中々に壮大だな、既に喚ばれたか？』

『まだです、ですが間もなくと思われます。教会側は王と面会を望んでおられるのでご連絡致しました』

『分かった、すぐ戻ろう』

嫌な日に重なってしまった物だ。ギルガメッシュの幸運値は【Ａ】とかなり高い部類な筈なのだが……まあ運が良いと言うだけでは回避できない事もあるだろう。

花冠を宝物庫の中にしまって立ち上がると、不満そうにエルキドゥが我を見上げる。

「むぅ……折角のお休みなのに仕事かい？」
「止むを得んな、エルキドゥも戻るぞ。帰りはヴィマーナだ」
「お弁当は帰ってから食べよっか」

怒らないどころか、不満も言わないエルキドゥは本格的に聖人な気がする。
ニコニコとした、優しさを昇華して聖母の域に達した笑顔で、リスや小鳥と別れを告げる。その姿が酷く絵になっている。
――少しだけ、良いか
そう思い、リスの丸々とした尾を撫ぜているエルキドゥを見て心を和ませる。
途端、景色が歪んだ。
生まれてから二度目となる眼の暴走。

眼に映った景色は、近代的だった。
鉄鋼の高層ビルが立ち並び、農民が極端に少ない。
その一箇所、切り開かれた場所へと視線は移る。
――学校か
そう知覚すると、視線は高速で移動し、教室の中へと導かれる。
一人の黒髪の、覇気のない少年。
赤髪の小悪人とその取り巻きに責められ、黒髪の少女に振り回される。お世辞にも楽とは言えぬ生活。
教室が突如として光り、一人も残らず消えるが視界だけは残る。
視界に映し出されたのは、少年の持ち物と思われるスマートフォン
……そこに映るのは…
我(オレ)。いや、ギルガメッシュだった。

「ギル？大丈夫かい？」
「王よ、ご無事でしょうか」

気が付けば我は王宮へと戻っていた。
眼が酷く痛む。例えるのであれば、真水に顔を付けて目を開いた時に感じるような染みる様な痛さ。
首を振って部屋を二、三度見渡すが、我の部屋には何時も通り鉱物類と金銀の豪華な物で、規則正しく並ぶ机や簡素な床では無かった。
声を掛けてくれたエルキドゥと、シドゥリに軽く応じて光景を必死に思い出す。
現代、高校、教室、光、そして――ギルガメッシュ
「Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒ」だ。あの画面は何度も、もはや日常の一部と言っても差し支えがない程に見た。
そして光が現れる前、教室には一面の魔法陣が描かれていた。これもまた見覚えが有る、今度はこの世界でだが。
……ここから導き出される結論なのだが、恐らくあの少年少女がエヒトに召喚されるのだろう。
だとしたら不味い、非常に不味い。
戦争の「せ」の字も知らない少年や少女が戦力になる訳が無い。ましてや、情操教育が行き届きすぎて、他国から「やり過ぎじゃね？」的な事すら言われてる日本だったら特に。
十数年、平和を恒久とする世界で生き続けた少年少女よりは、徹底的に訓練した兵や魔術の研究者の方がまだマシだ。ディンギルの普及が上手く行けば戦線も有利になる見込みだし、魔獣処理を上手い口実を付けて押し付けられない物か。
そう思慮の渦に入ろうとした途端、声が響いた。
「ご報告です！王よ、勇者様方が召喚されました！」
どうやら、我の幸運値は良くとも、今日の運勢は悪い様だ。

王、謁見に赴く

『……王よ、聞こえていますか？』
『問題ない。続けておけ』
『御意』

三十人ほどの、青年らしき者達が大広間に通され、椅子に座っている。我とエルキドゥはその光景を見ていた。
教会側の動きを監視するためにも、一人や二人の間者は送り込んでいる。千里眼の景色と、間者の持つ集音アーティファクトを使用すれば、問題なくリアルタイムで見る事が出来る。

「皆、意外と若いんだね。仲良くなれそうかな？」
「腑抜けた事を抜かすな？エルキドゥ」
「だってさ、僕達はお互いに友達が少ないじゃないか」

神の使徒であるからには、少しは警戒せねばならないと思うのに、そんなのほほんとした感想を抱いたエルキドゥのマイペースさに、少し和む。
……友達が少ないのは少し、止むを得ない気がするぞ。
そんな会話をしていると、我ほどでは無いが優雅な服を着て、我ほどでは無いが人当たりの良さそうな老人が話を始める。
この老人の名前はイシュタルと言って、昔は宝石であわあわする方と間違えて心に深い傷を負った物だ。
爺の方のイシュタルは、その勇者達に淡々と召喚された経緯、そして所々にエヒトの素晴らしさを交えて語った。その恍惚とした表情にエルキドゥがちょっと引いてて面白い。
『ふざけないで下さい！結局、この子達に戦争させようってことでしょ！そんなの許しません！ええ、先生は絶対に許しませんよ！』

説明が一段落付いた途端、一人の少女が立ち上がって一息に怒鳴り立てた。
数十名の中で唯一、制服を着ていない者。しかし衣服の堅苦しさでは恐らく、学生の制服を上回るだろう。
それでも少女だと思われる程、幼い顔と体付き

「先生……自らを教師と言ったか？」
「だね、僕はてっきり誰かの妹かと」

そう言ってプンスカと精一杯声を荒らげているつもりの様だが、容姿だけでは無く声まで幼い。周りの生徒達もそう感じて居るようで、緊迫感を覚える筈の局面が幾分と和む。が、それも一瞬。
イシュタルは告げる。帰還は不可能だと、何故なら喚んだのは我々では無いのだからと。
その刹那に巻き怒る――喧騒
ある者は叫ぶ、帰れないとはどう言う事だ、と
ある者は叫ぶ、戦争なんて冗談では無い、と
ある者は叫ぶ、何でも良いから帰りたい、と
その様子を遠巻きに爺が見つめる。そして分かりやすく不満を顕にしている。恐らくだが、エヒトに選ばれて否定的な日本人一行(仮)に静かにキレているのだろうか。
価値観の違いが浮き彫りになっていて、我としては中々に面白いと思うのだが。見よ、人がゴミのようだ。

『皆、此処でイシュタルさんに文句を言っても何にもならない…俺は戦おうと思う』

机が一度叩かれ、一人の青年が立ち上がる。
茶色の髪に優しげな青い瞳、何処か「王子様」然とした、美青年の部類だろう。
彼は一息にそう云うと、回りからも賛同の声が流れ始める。掌ドリ

ルという現象はこの事を言うのだろうか。しかし…何と言うか…

「さらって戦うって言っちゃってるから、何か戦争って事が見えてないのかなーって思っちゃうね」

そうそう、説明上手エルキドゥ。

もしも我が同じ状況だったら、この世界の情報とか戦争の現状を把握したいから、何日間か猶予を貰おうとする。そうで無ければ、最悪負け確定の戦争や、どうあがいても絶望な状況に置かれるからだ。

にも関わらず、この男はあっさりと戦うと言い、周りもそれに理由も無く賛同する……

日本人の国民性が出たな、アイツがやってるから俺も大丈夫理論。

一口にそう言うつもりは無いが、少なくともこの学生の人々は〝そんな部類〟である気がしてならない。

先程までは間違いなく戦争を否定し、元の国へと帰りたいと嘆いていた筈なのに、一人が言った途端にすぐコレだ。しかも肝心のその男の覚悟も酷く薄いと見える。

『もう良いぞ、興が削げた』

『王の御心のままに』

イシュタルの声を聞いていた、メイドの一人が静かに動き、音も立てずに退室した。

途端、中継映像から声は絶え、何名かが席を立って堂々と話す姿が映るがどうでも良く、興味の「き」の字も抱かない。菓子で口元を汚しているエルキドゥの口元を拭く方が何十倍か有意義だ。

シドゥリが淹れてくれた極上の茶と、バターケーキは既に冷めきっていて台無しだ。バターケーキは冷めている方が好きでは有るが。

コップの底に溜まった茶の、砂糖の濃い部分を頑張って飲もうとしているエルキドゥを尻目に、側に居た者達に声を掛ける。

「謁見室を開けておけ、それと我の玉座を執務室から謁見室まで運べ、慎重にな？あとは…シドゥリを喚んでおけ」
「シドゥリにケーキ美味しかったって言っておいてね！」

勇者が来るまで、僅かに時間は有る。その空き時間が酷く息苦しく、緊張感のあまりに手汗を握り締めた。
勇者との会談には緊張する要素は無い。人を疑う事を知らない表面しか見る事の出来ないあの、劣化型衛宮士郎は割とどうでも良くて……問題はあの黒髪の少年。
前世の記憶を頼りに結構なオタクと見た。しかもＦＧＯ内のギルガメッシュも最終再臨だった。
……つまり下手すりゃ我がギルガメッシュモドキだとバレる。それだけは嫌だ…物凄く嫌だ。
【忘れるな、イメージするものは常に最強の自分だ】
そう脳内のアーチャーが激励をくれる。ありがとう、ギル様はアンタの事嫌いだったけど我は普通に好きだぞ。アンリミテッドブレイドワークスかっこいいし、凛との絡みも良かった。
脳内には、威厳に溢れて玉座に深く腰掛ける金一色の王様が現れる。自分だけど自分では無い、そんな圧倒的な「王」の姿を夢想する。世界最古にして最強の王。
それに少しでも近付くのだ。

▲
▲
▲

「では、王宮へと向かいます。これからの移動は馬車となりますので、お手数ですが移動をお願い致します」
その声を聞き、クラスメイトの皆の側に侍っていたメイド達が動きだした。一人、一人とおずおずと席を離れて行く。

その人の群れを遠目にハジメは、飲み物に映る酷く歪んだ自分の姿を見て溜息をついた。
戦争への参加を表明した以上、戦いの術を学ぶ必要が有るだろう。魔法に剣術に……何れもハジメ達が居た日本では、必須という訳でも無い。受け入れ態勢が整っているとは聞いたが、いつか見た異世界もののラノベで、最初は優しくとも最終的に従属させられてしまう、と言う展開も有った。口だけでは何を言う事も出来るし、契約書も有る訳じゃない。

「南雲くん？行かないの？」

そんな思考に入ろうとすると、背中から声が響いてハッとする。
声を掛けた少女の名は白崎香織。学校内で二大女神などと言われ、絶大な人気を誇る美少女だがハジメに良く構うのだ。
これだけ聞けば、大抵の人は「ラッキーだ」とハジメの事を言うだろうが、ハジメからすれば良い迷惑というのが本音。その所為でクラスの男子や女子から疎まれていると言うのに、当の本人に自覚がないし、止めてと言おうにも言えない状況なのだ。

「ありがとう白崎さん、直ぐに行くよ」

そうとだけ返して、高速でハジメは走り出した。
このままでは馬車の隣の席を取られかねない。そうした場合、きっとまた天之川や檜山に絡まれる。

「ごめん！清水くん隣良いかな!?ありがとう！」

表に並んでいた馬車の列。その中でもハジメは特にクラス内で大人しい清水の隣に食い気味に座った。
彼は一瞬だけ驚いた様にどもったが、ハジメに強く何も言うことはしなかった。

馬車はそれほど大きい訳でも無いので、何騎かでクラスメイトが分かれて座っているようだ。

「間もなく出発致します。王宮と教会は少し距離が御座いますので、少しお時間を頂く事になりますが、ご了承下さい」

イシュタルのその声が少し響き、間もなくして振動が始まる。

良く馬車は快適では無いと聞くが、今回に限ってはそうでも無い様だった。確かに時として揺れる事はあるが、別に酔ったり気持ち悪くなったりする程ではない。

開放的な風が流れ込んでいて、五感を気持ちよく刺激する。流れて行く光景の非現実的な雰囲気と、人々の喧騒が心をどうしようもなく高揚させる。

「異世界系…って事なのかな…」

誰に聞かせる訳でも無く、そう呟く。

アニメや漫画、ラノベなどの類のサブカルチャーにどっぷりと浸かったハジメは、異世界に召喚されるという状況を思わずそう例えた。

使い古された様な設定だが、未だに根強い人気のある異世界モノのライトノベル。その状況に酷似した状況に思わずそう言ったのだった。

「な、なあ…南雲って…アニメとか見るのか…？」

ハジメの言葉が聞こえたのか、隣の席の清水がハジメにそう声を掛けた。

清水こと、清水幸利は所謂隠れオタクである。

クラスの中心である天之川光輝の影響で、オタクと言う人種は恥ずべきモノであり、迫害にも似た扱いを受けている。その代表格が南雲

ハジメなのだ。
それを見ていた清水は、クラスでは自身を封じ込めて「大人しい」と言う評価に当て嵌めて暮らしていた。
しかし家では、その鬱憤を晴らすかの如くサブカルチャーを嗜み、ライトノベルや異世界の概念も当然熟知している。
今、馬車の中に密閉された空間内には天之川光輝も、それに熱を帯びた視線を向ける女子も居ない。ならば、この状況の感動を分かち合おうと誰が咎めるだろうか？
二人の会話は静かに始まる。最初は落ち着いた両者の口調、この状況を分かち合い、互いに共通した点を語らう。そしてその語らいは飛躍を重ね、何時しかは最初の大人しい口調を投げ捨てて、激しい程の声で話し出した。

「だからね、僕は思う訳よ！七章こそ至高だって！」
「いやさ！分かるよ!?エレちゃん可愛いし、賢王クッソかっけえし！でも最後のソロモンでしょ！アレ泣かねえ奴居ねえって！」

その喧騒に御者は最初こそ、喧嘩か？と首を傾げたが今では気にしてはいない。
二人の激化した語らいに終着の目処は立たず、結局王宮に辿り着くまで続いた。馬車から降りた時、二人の間にはそれまでに無かった、確かな「絆」が残ったのだ。
そしてハジメを含むクラスメイトが馬車から降り立った時、唖然とその場所を見つめていた。
そこは、其処だけが切り取られた様な空間だった。
ピラミッドの如く、上に向かうに連れて細く伸びる建物。
堀の様に建物の周辺には溝が有り、水で満たされている。
建物は全体的に黄土的な金色をしており、見るだけで眩しさすら感じられた。
その余りの美しさに、騒々しく騒ぎ立てる様な女子も居ない。
ただ、クラスメイトの一行は、その壮大さと圧倒的なまでの美しさ

に呑まれていた。

「良いですかな？皆様、行かれますぞ」

イシュタルがそう声を掛けなければ、比喩なしに日が落ちるまでこの宮殿を見つめていたかもしれない。それほどまでに圧巻だった。

宮殿の中は開放的で、入り口は扉では無く、常に開いている物だった。その中央へとイシュタルが足を踏み入れようとした。しかし

「失礼、イシュタル殿。貴方様の入殿許可は出ておりません。お引取りを」

「な…！使徒様方の謁見許可は…」

「それは出ております。しかし王は貴方様の入殿を認めておりません、お引取り願います」

「し、しかし、もし使徒様方に何か…」

「ご安心下さい。我が王の居る場所は王国中で最も安全で御座います。それと、王が用途不明の助成金について話したいと…」

「っ！それは今度だ」

イシュタルと門番はそう問答をすると、表に滲み出ていた苦虫を噛み潰した様な表情を収め、好々爺とした笑みに切り替え、入り口とは少し離れた場所に座った。

「これより先は、私がご案内致します」

そう言って、門番がそのままハジメ達の案内へと変わる。

門番は騎士然とした男で、流れる様な黒髪と美しい青の目が印象的だ。女子のヒソヒソとした声が、騒がしい宮殿内へと溶けていく。

暫く宮殿内を歩いていると様々な物を見る。金箔が貼り付けられた息を呑む様な像に、何処か可憐さを思わせる一輪の花。それらを横目に進んでいると、唐突に門番が一つの部屋で止まる。部屋の前は妙

に小綺麗に飾られており、凱旋門もかくやと言う物だ。

「王よ、御一行様です」

「許す。通せ」

重厚な純金の扉が音も立てずに開く。

そしてその先に居るのが――

「良く来たな、雑種共」

「王」そう躰が理解した。

ハジメやその他の者達がその言葉の意味を知るのには、時間が必要だった。

躰が、跪きたいと言っている。この生物の前に膝を突き、崇めたいと心から感じる。

先程の門番が、王が居る場所が最も安全だと、そう言った理由が此処に有る。この者が害されるので有れば、何をしても無駄だろう。

それほどまでに、暴力的な威厳(カリスマ)だった。

「初めまして、王様。俺はこのクラス代表の…」

「誰が話す事を赦した？」

洪水(王)に向かって、一滴(天之川光輝)の水が動いた。

比喩でも何でも無く、そうであった。クラスの中での王にも近いカリスマを持つ天之川光輝ですら、この王の前には有象無象と呼ぶ他なくなる。

「謁見の儀も弁えておらんのか……雑種は雑種でも、誰の手にも渡らなかった真の雑種共。此処まで無知であれば逆に愛嬌が湧くぞ」

王の言葉から感じられる声は――失望

無論、日頃から生きている中で、王と謁見する機会など先ず無いハジメ達にそれを求めるのは、些か酷な話では有るが、王から失望を受けたと言う事が何よりも心を支配していた。
ハジメは、異世界系のラノベで、良く行われる様にその場で片膝を突いて地面に伏す。

「ふん、少しは素養の有る雑種が居たか。其奴の僅かな智慧に感謝するが良い」

その声を同時に、王は立つ。
まばゆい光に包まれ、影でしか見る事の無かった王の姿が――今一歩、一歩とハジメ達に近付くが光は決して絶える事が無い。その圧倒的な存在感を前にハジメは一滴、水を額から垂らす。

「面を上げよ、我が赦す」

ハジメの正面でそう声が響いた。力の一片も籠もらない声、にも関わらず張り上げた様な心に響く声。
その声に導かれるかの如くハジメは顔を持ち上げる。目に凄まじい程の光量が入り込み、思わず目を細めて見た――その姿。

「ギルガメッシュ……王…」

英雄にして、王。
賢人にして、王。
世界最古にして、最大の王。正しくギルガメッシュだった。

王、勇者御一行と触れる

「え、えっと、その…うちの生徒の御無礼をお許し下さい…」

ハジメと王の視線が合ったその直後、ハジメ達の教師である畑山愛子はハジメの前へと出て深く頭を下げて、最敬礼をした。日本の謝罪において使われる最上級のスタンス。

圧倒的な威圧感と存在感で充満した謁見室の中、心を奮い立たせて行った生徒を庇う行為は称賛されるべきだろう。それに応じるように、王の視線はそちらへと向けられる。

「貴様が代表者か？妙だな、奴では無いのか？」

そう言って、王は天之川光輝を顎でしゃくる。先程、代表者と先に名乗ったのは天之川だった。

無論、王は此処に至るまでの光景を千里眼と共に見た為、状況は知ってはいるが。

「彼はあくまでクラスの代表で…私が責任者です。罰を与えるのであれば私に…」

「良い、貴様のその太い肝に免じて赦そう。我の名を勝手に呼んだその雑種もな」

そう言って王は踵を返して玉座に深く腰掛けた。威厳に溢れるその姿だが、本人はギルガメッシュと言われた事が少し嬉しくて、機嫌が大幅に上昇していたりする。

王の姿を直視できない理由であった太陽が雲に隠れ、その姿が顕となる。

金細工の様な黄金の髪に、紅玉のような双眼。均整の取れた口鼻と、自らを更に飾り立てる多々の金銀や鉱物。真ん中が全開にされた服を来ていて、女子はその美しい容貌と体躯に思わず赤面する。

「ハイリヒ国王、ギルガメッシュである。尤も、あの爺に聞いたかもしれんがな」

天井にも届きそうな巨大な玉座に深く座り込み、頬杖を突きながらそう言い放った。

その口上に何人かのクラスメートはピクリと体を動かし、ハジメに至っては興奮を抑えるのに必死で、拳を真っ赤になるほどの握力で握り込んだ。

興奮とした思考の中で、ハジメは精一杯に頭を回す。イシュタルの入殿を拒否した王と、王国の中心と離れた教会。

きっと、教会の立場と言うのはこの王の前では決して多くは無いのだろう。

「貴様共の事は既に聞いた。精々、我の為に励み、我の為に捧げるが良い」

傲慢、その言葉がこの上なく似合う様な主張。

それでも「そうしたい」と思わせてしまうのはこの王の魅力なのだろう。

サイン下さい、王の財宝見せて下さい、エヌマ・エリシュして下さい。そんな欲望がハジメからは浮いては止まない。

先程、強く語り合った清水も同じ様な興奮を隠せずに、小さく何度も「マジか…」と呟いていた。

「では、下るが良い。晩餐の席もう一度見(まみ)えるとしよう」

そう一方的に言うと、ギルガメッシュは玉座を立った。

羽織っていた真紅の外套が揺れ、夕焼けの連れ雲の様に棚引くと部屋から王の姿が消える。

ハジメはその後姿を、見えなくなるまで見つめていた。

「ふぅ……良かったぁ……」
宮殿の最上階から、馬車を見送りながら我はそう呟いた。
考えられる最悪のシナリオ、偽ギルばれは何とか回避した。それに強敵だと思われたあの少年も、我のことをギルガメッシュって言ってくれたし、凄い嬉しい。これでロールプレイの指針を掴んだ気もするし、謁見を許可して良かった。

「やっほーギル。どうだった？友達出来た？」
「王よ、大丈夫でしたか？……無視とかされませんでしたか？」
「貴様等は我のお母さんか」

部屋の中にエルキドゥとシドゥリがやってくる。
これから行われる晩餐会に参加する為、エルキドゥの格好は何時もの白い布では無く、汚れの目立たない黒の上下服。へそが出ていなければ完璧だった。シドゥリも一応正装をしていて、我が幾つか貸した宝石が良く似合っている。

「晩ごはん楽しみだねぇ、僕はあの白いドロドロが好きだな」
「マヨネーズだな、シドゥリが少し反応したではないか」
「違うよ！タルタルだよ！」
「主成分は変わらんぞ」

一瞬、シドゥリがピクリと動きかけたのを我は見逃さない。まあシドゥリも成人しているからな、そういう系も知らない筈が無いな、ウン。
黄金の篭手を外し、純金の耳飾りを付ける。ターバンを取り外して蒼玉の首飾りに首を通した所で、おめかしは終了。晩餐会に出席するもう一組を待つ。

「誰だっけ？ギルの弟？」
「父の弟だな、大公と言うヤツだ」
「ギルのお父さんに会いたかったなぁ…」

そう言うエルキドゥだが、父親は我が１５歳の時に亡くなってしまった。
割と人気があったらしくて、父の墓にはお供え物が絶えた事が無い。我も命日にはきちんと墓参りをしている。大公は野心が無い人であり、特に大きなトラブルが有った事もない。

「王よ、遅ればせながら参りました」

扉が三回ノックされ、シドゥリが開けたドアから初老の男が入ってくる。
その男こそが、我の叔父に当たる大公。エリヒドと言う名の男で、それに伴って一組の男女が入ってくる。
女の方をリリアーナ、男の方をランデルと言い、従兄弟に当たる人物達。もしも我が亡くなれば王権は此方の一族に譲られる。

「久しいな。エリヒド、リリアーナ、ランデル、息災であったか？」
「偏に王の御威光故です」
「元気でしたよ！」
「俺もだ！」

目以外、我と良く似た一族を見ていると、やはり遺伝という物を強く感じる。
何時の間にか隣に立っていたエルキドゥが、リリアーナとランデルを目にも見えぬ速さで両脇に抱き抱えて、真顔で我の方を見て一言。

「ギル、飼っても良いかな」

「本気で言っているのなら貴様が心配だぞ。我」
「だって……可愛いじゃないか、少女ギルと少年ギル」
「その理論は可笑しいぞ。それと我とは少ししか似ていない」

そう言うと、名残惜しそうにエルキドゥはエリヒドの隣に二人を下ろす。途中で何度も我の方を見たが、駄目なものは駄目なのだ。
しょんぼりと下がった肩に触れ、優しく背を擦ってやる。分かるぞエルキドゥ…我も昔、ギルガメッシュにならってライオン飼おうとしたんだ…結局、母親から大反対を食らって飼えなかったけど、本当に残念だった。最近もこっそりライオンを連れ込んだのがバレて、シドゥリにガチギレされたんだった。

「ギル……」
「エルキドゥ……」
「ご友人様、王、お時間です」

僅かに良い雰囲気へとトリップしかけた我とエルキドゥを引き剥がすかの如く、シドゥリはそう言って我とエルキドゥの両手を掴んでグイグイと進んで行く。
とっくに陽が落ち、薄暗くなった宮殿の奥へ奥へと、我とエルキドゥの姿が進んでいく。
この日、リリアーナ達はハイリヒ王国のパワーバランスを知ったと言う。

その後、大きなトラブルも無く晩餐会は執り行われた。
例の気弱な少年を始めとした、色々な少年からの視線が我に注がれていたのが印象的だった。流石ギルガメッシュ、控えめに言って神。
一応、明日の勇者のスケジュールを寝る前に確認した所。メルドのブレーキ役が少ない様にも感じたので少しだけ増員した。明日は各々の能力確認の為にステータスプレートを配るらしい……何だそれ

「王よ、内密で入手致しました」
「大儀である。下がれ」

翌日、その日は悪いとも良いとも言えない様な日だった。
雲が決して多い訳でも無く、太陽の陽もそこそこに温かいが風は強い。しかも湿度は乾燥していて、風が硬く感じられる。陽は既に昇りきっていて、今居る宮殿から見渡せば様々な者が犇めき合い、ごった返しとなっている街並みが良く見える。喧騒までもが聞こえてくるようだ。
そんな中、執務室には我とシドゥリのみを残し、そのシドゥリも間もなく去ろうとしていた。

「これがか……」

シドゥリが完全に去った後、我は机にシドゥリが残した二枚の銀色のプレートを手に取ってそう呟いた。
これは、ステータスプレートと呼ばれる物でその名の通り、所有者の能力値をゲームの様に表すのだそう。と言うのも、我はこれを使うのは初めてである。
本来で有ればこれは全ての人が持つ、我の元の時代に合わせた言い方をすれば「未成年も持つ免許証」的な扱いであるからだ。
我は持たないと言うより、持つ機会が無かったのだ。主に父のせいで。
これは後に父の側近から聞いた話なのだが、我が父が「慢心、いくない」と言う考えだったので、我と他者の比較をさせ無い為に、即位まではステータスプレートを与えない予定だったらしい。
結局、我がステータスプレートを得る前に父が没してしまい、我が

顔パス的な感じで必要としていなかった為に、忘れ去られていた。
ギルガメッシュから慢心を取ったら、唯の強くてイケメンな王様キャラじゃないか。そんなギャルゲーの攻略対象みたいなギル様はギル様じゃねえ。
そんな愚痴を亡き父に零して、ステータスプレートをひっくり返したり、光で透かしたり、指で弾いてみたりした。見た所では、何かエヒトに通じる訳でも無さそうだし、早速使ってみる事としよう。
使い方は割と簡単、自分の血を一滴垂らすだけ。適当に宝物庫から出した方天画戟で指を裂いて血を擦り付けた。
途端――爆発した
何処からでもない、自分の手元で起きた小さな爆発。爆発源は案の定とも言おうか、ステータスプレートだった。
チリチリと、スチールウールの実験を行うかの如く燃えるステータスプレートに、水をぶっかけて即座に鎮火する。
昨日から外していた黄金の篭手を右手に付け、そのまま銀片を拾い上げる。

「……役立たずか」

ステータスプレートを覗き見て、そう呟く。
名前はギルガメッシュと表示されてはいるが、それ以外が解読不能な化け文字……ラフムみたいになっている。
この結果は、割と予想通りだ。
理由となるのが我の宝具である、『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』これの無尽蔵な情報量にステータスプレートが許容量超過、所謂処理落ちをしてしまった為だろう。
『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』には、今や過去だけでは無く未来の宝物も収納される。故に実質、取り出せないだけで無限に宝物が収納されていると言えるのだ。
例え、常人の1万倍もの魔力を持つ者でも、無限に魔法を放つ事は出来ない

例え、人の数億倍の速度で計算を行う機械も、無限の計算を終える事は出来ない。
例え、エルキドゥや我であろうと、無限の魔物を相手にすれば流石に勝てない。
つまり、無限を受け入れる事は何人たりとも出来ないのだ、それがエヒトでも例外ではない。故に我を量る事など出来ないのだ。
……と此処まで言っておいて、安心した自分と少しがっかりした自分が居る。
自分のステータスが知りたかった反面、ギルガメッシュが此処まで凄いと再実感出来た事も嬉しい。余ったステータスプレートは予備の予定だったが、エルキドゥに渡しておこう。
さて、ステータスプレートの事を大方知れた所で、勇者御一行へと視線を向けよう。
こんな時、やっぱり千里眼と言うのは便利過ぎると思う。

「ふむ、此奴は中々魔力が高い。弱点は体力と俊敏か、であれば後衛が相応しい」

昨日は謁見室にあった、我愛用の玉座から勇者御一行の様子を見る。
他人の情報を盗み見るのは良い気がしないし、日本だったらプライバシーの権利をバリバリ侵害している。
我が法だ。などと言うつもりは無いが、必要な事なので許されて欲しい。必要な犠牲でした。
粘土板に、我の考えた「勇者一行、起用方針」がどんどんと刻まれて行く。こうしていると、育成シミュレーションをしている様で楽しい気分になってくる。
適材適所、向きを伸ばして不向きを克服。基本的だが、それが人の上に立つ中で大事だと実感させられた事。

「ん？此奴等は……」

我の興味を引いたのは、教師だと言っていた割と大胆なちっちゃい先生。
天職は「作農士」他のステータスも低く、一見すれば利用価値は低いが本質はその技能にある。
土壌管理に土壌回復、範囲耕作、品種改良に成長促進と、一人で農業革命を起こせそうなステータスをしている。
戦争において安定した兵糧が取れるのは物凄くデカい。
ステータスや技能は裏切らないが、天気は平気で裏切って来る。戦争だったら一国に一人は欲しい逸材だ。

「シドゥリ、良いか？」
「問題有りません」
「では、後にコレをメルドに渡しておけ。我は仮眠を取る」
「畏まりました……」

三十人近い人材の育成方針と、農業チートの教師の利用価値。それに加えての日々の執務を終えた我は、正しく満身創痍と言うのが相応しい状況だった。
だからシドゥリに渡した際に聞こえた、「ちょっとくらい……見ても良いでしょう」と言う小さな声は幻聴として扱った。

仮眠から起きた後、シドゥリに褒め殺しにされた事は言わなくとも良いだろう。

王、勇者にドン引きする

「王よ、メルドから勇者一行の成長の経過報告が出ました」
「そこに置いておけ、後で目を通そう」

山のように積み上がった石版とにらめっこしていると、勇者達の成長経過が出たという報告を受けた。
勇者との謁見から既に二週間が経過していて、各々の能力やレベルにもある程度の傾向が出ている事だろう。

「それとです、ウォルペンよりディンギルの試作品が完成したとの事です。」
「……納期はもう少し有ったがな、早く仕上げるとは流石だ」

オーライ、オーライとシドゥリが部屋の外の廊下に声を上げる。
数十秒ほど待つと、何人かの男に担がれて〝ディンギル〟の砲塔が現れる。大砲よりもスマートで長い形をしているソレは、記憶の中にある〝ディンギル〟と全く同じ形だった。

（頼んで良かったぁ！）

そう心の中で叫ぶ我、前にディンギルの試作を任せた所、「砲撃機は太いのが当然！」みたいな事を言われ、細長いと耐え切れない可能性があるとも言われて半ば諦めていた。
しかし！遂にやってくれたのだ！試しに軽く魔力を流してみたり、宝具を装填してみたりするが。動きには全く支障は無い。
……パーフェクトだ、ウォルター。

「よし、後はコレを３６０機作り、設置するだけだな」

我がそう言った途端、シドゥリを含めた数人の男達が膝から崩れ落

ちた。
あ……そうだな、コレを作るのに既に途轍もなく大変だっただろう。なのに更にそれを３６０個も作るなんて確かに考えられない程の重労働だ、膝から崩れ落ちても可笑しく無い。

「いや、今では無いぞ？ゆくゆくの話だ」
「王よ……ゆくゆくでも多過ぎます……何ですか!?王は何と戦う予定なのですか!?」
「無論、魔人族だが」

嘘だよ、シドゥリ。本当はエヒトだよ、騙してゴメン。
十数年で毎日魔力を蓄えた宝石類と、使われる事の少ない癖あり訳ありの宝具、これらが有れば少しは持つだろう。それでも宝物が減ると精神的に来る物がある。断腸の思いとは正しくこの事か。頼むから魔人族、侵攻してこないで。

「大儀である、ウォルペン。我から褒美を与えよう。何なりと望むが良い」
「ヘッ、褒美なら俺じゃなくてあの小僧にやんな。王様よ」
「あの小僧？誰の事だ？」
「何だい王様、忘れちまったのか？アンタが送ってきた
――あの南雲ハジメって坊主を」

訓練施設の端、其処にハジメは寝っ転がりながら閉鎖された空を見ていた。
最後に寝たのは何日前か記憶は無く、転移した先でもデスマーチに襲われる自分の運命を嗤う。

ハジメが二週間の訓練で手に入れたのは、筋力でも魔力でも無い、派生技能と経験だった。王国直属の錬成士達が忙しなく動き回る鍛冶場に入っては、見て学び、実践の繰り返し。

中々に錬成が馴染んだと思えば、今度は国中の全錬成士を集めて何やらモノ作り。それが、ギルガメッシュの宝具である『王の号砲（メラム・ディンギル）』の発射台だと気が付き、オタク心全開で体を酷使させた。

それがこのざまである。

何時の間にか発射台のディンギルは完成しており、錬成士の多くは朝にも関わらず、そのまま打ち上げへと赴いた。

ハイリヒ王国直属の錬成士達は、王へと報告する為にいち早く引き上げ、残されたハジメは死んだように眠る予定だったが、今日に限っては全員参加の共同訓練だった。

まだ訓練は始まっていないが、意識を保つのに大分限界を感じている。

休んでも良いかと聞いたのだが、教育係のメルドさんからは大事な発表が有るので見学を言い渡された。

「あれ、南雲じゃん。お前何寝てんの？無能なのに努力もしねぇのかよぉ～」

「ギャハハ！檜山本当だからって言い過ぎ！」

「良く今更顔出せるよな～俺だったら恥ずかしくて無理だぜ！」

「大介、コイツ無能過ぎて哀れだからさぁ、俺らで稽古つけてやんね？」

ハジメの視界に、空では無く四人組の男の顔が映る。

彼らはハジメのクラスメイトなのだが、ハジメとの関係が良い訳では無い。むしろ率先してハジメを責めていた者達だ。その中心格が、檜山大介という人物である。

彼は白崎香織に好意を抱いており、ハジメが彼女に構われている事が気に入らないのだ。それが今、こうした社会現象とも成った「いじめ」に繋がっている訳だが。

「大丈夫だよ、僕は疲れてて……」
「はぁ!?無能で怠け者のくせして何言ってんの?マジ有り得ないんですけど、お前は素直にありがとうございますって言ってろよ!」

そう言って無理矢理に立たされるハジメ、内心では唾が飛んだなあ……と諦めに近い感情を抱いていた。
しかし、そんな感情も飛ぶ程の鈍い鈍痛が脇腹を走る。檜山に殴られたのだと、僅かに遅れて理解した。
ハジメが寝転がっていた場所は、丁度訓練場からは死角になっていて人気も少ない。

「ほら立てよ、訓練はまだまだだぞ?」

そう言って檜山とその取り巻きがハジメの腕を掴んで立たせる。
殴る、蹴ると言う暴力は止まる事が無く行われ、遂には檜山の取り巻きの一人が魔法を使い出す。

「ここに焼撃を望む――〝火球〟」

その名の通り、火のボールがハジメの背中に向かって放たれる。
しかし不幸中の幸いと言うべきか、ハジメは体のバランスを崩して転倒した為、火球は直撃する事は無かった。しかしそれを皮切りに、魔法を交えた攻撃がハジメを襲う。
那由多にも感じる苦しみと痛みの中、ハジメは自分の情けなさと弱さを呪う。
そんな自責も限界が近付き、意識を手放しそうになった頃、突然として威厳に溢れた声が響く。

「――何をしておる」

その声に檜山達は体をぶるっと震わせた。
それはそうだろう。その声の持ち主は、自身が滞在する国における最高権力者、ギルガメッシュに他ならないのだから。
何をしても絵になる様な黄金の王は、不快な汚物を見るような視線で檜山とその取り巻きを捉えていた。

「お、王様……その、誤解です。これは訓練でして……」
「ほう？貴様は二週間やそこらで他人に訓練を課せる程の実力を得たのか？」
「そ、それは……」
「言い訳は良い、早急に止めよ。我が友の花が散る前にな」

そう言ってギルガメッシュはハジメが倒れている場所の奥を指差す。
そこには赤と白の二輪の花が、仲睦まじい老夫婦の様に静かに、控えめに咲いている。
特別な花でも無い良く有る花だが、それは確かに咲いていて、エルキドゥが植えたものだった。
檜山は数秒程ギルガメッシュの顔を見て、小さな舌打ちと苦しい表情を浮かべると、ハジメの周りから退こうとした。

「南雲くん!?」

それと同時にやってくる来訪者に、檜山の顔はさらに青褪める。それこそが彼が好意を抱く、白崎香織だったからだ。
香織は怒り心頭と言った表情で、支援系の天職とは思えない程の俊敏でハジメの元へと向かう。その近くには例の勇者や、戦士、二大女神のもう片割れなども居た。

「あ、ありがとう、白崎さん……」

天職「治癒師」を持つ香織から回復を受け、鈍痛と僅かに滲む血が収まりつつある。
しかし、それとは裏腹に香織の怒りは収まらない様で、ニコニコとした笑みの奥にほのかな殺意をにおわせる。
そことは少し離れた位置で、檜山が天之川からの注意を受けていた。

「〜だから檜山も、いかなる理由が有ってもこんな事をクラスの仲間にするのは駄目だ」

それをハジメと檜山の中間地点あたりで聞いていたギルガメッシュは、「お、割と良いこと言うじゃん」と言った心境で、ハジメの治療が終わるのを待っていた。と言うのも、ギルガメッシュはハジメに用があるからである。

「でも、南雲自身ももっと努力するべきだ。確かに南雲は非戦闘職だけど、訓練には一度も出ていないだろう？俺が南雲の立場だったらもっと努力してるし、訓練にも顔を出すよ。檜山達も、南雲を真面目にさせようとしたのかもしれないだろう？」

……何言ってるんだコイツ、もしかして今のは笑い所だったか。中々、人を選ぶ芸風なのだな。
上記がギルガメッシュの抱いた感情である。しかし周りは誰一人として笑わず、ジョーク等では無く本気で言っているのだと悟った。
勇者、こと天之川光輝は、所謂性善説信者である。
人間は悪い事をせず、したとしても何か理由があるのだと、そしてそれは相手側に有るのかもしれない！と本気で考えるのだ。
しかし、ハジメに訓練では無い別の場所へと赴かせたのはハジメ自身では無くて、ギルガメッシュの考えなのだから、救い船を出さねば理不尽の極みだろう。

「ああ、それは我の指示だ。奴には訓練の他にするべき事が有ったからな」
「するべき事？」
「これだ」

そう短く言うと、空中に黄金の波紋が現れる。
ギルガメッシュを象徴するとも言える、宝具の『王の財宝』。それにハジメは飛び起き、生目で見る『王の財宝』に興奮を顕にしていた。
宝物庫の中から取り出されたのは、今朝にギルガメッシュへと渡された〝ディンギル〟だ。周りが太い大砲を推す中で最後まで抗い、デザインしたスマートな細い筒。金属で出来ている為、非常に重いがギルガメッシュの筋力であれば、問題なく一人で持つ事が出来る。

「ディンギル、大砲と呼べば良いか。以前から開発していたのだがな、上手く行かなかった。それを此奴が完成させたのだ」

それをそのまま地に下ろし、手で擦り始めたギルガメッシュ。
興味を抱いたのか、それなりの数となったクラスメイトもハジメや天之川の周辺に寄って来る。
ざわざわと、ちょっとした騒ぎになりつつ有るが、それでも天之川はキッと睨み付ける様な表情と眼力を浮かべてギルガメッシュに声を張り上げる。

「何でですか！どうしてこんな野蛮な物をっ……！」
「野蛮？どこが野蛮なのだ」
「だって！こんな命を奪う為だけの物を作るなんて可笑しいじゃないですか！」
「命を奪う事は野蛮か？雑種」
「当たり前だ！」

その〝野蛮〟な行為に進んで参加しようとしたのはお前だろ！

と声なきツッコミが心の中で湧き上がったギルガメッシュだが、感情的になるのは良くない。
大事なのは気付き、そして理解する事なのだ。一方的に正論をぶつけても相手には不満が残る。馬鹿は正論じゃ納得しない。
大事なのは冷静に、一個一個分からせる事なのだ。

「良いか?貴様は今、戦争に参加する自らを野蛮と言った事に変わりないのだ」
「何でです!俺はそんな……」
「戦争という事はな、命のやり取りをする事だ。今、我と貴様が話している最中で誰かが死んだ。それは決して揺るがぬ真実なのだ。そして此奴の兵器でその何人もが救われる事となる。貴様は命が救われる事を野蛮と言うか?」

英雄王でも、賢王でも決して聞くことは出来ないであろう、優しい諭しだった。

「今は分からずとも良い、しかし努々忘れるでないぞ。南雲ハジメは今、これから先の多くの命を救ったのだ」

天之川はもう、何も言い返す事をしなかった。
事の一部始終を見ていたクラスメイトは、静かに王の声色に聞き惚れていた。そして各々の心には僅かな「戦争」と言うワードが渦巻き出している。
そして当のハジメはと言うと、自身の功績が認められた事、生目でギルガメッシュを見る事が叶った喜びでいっぱいいっぱいだった。

「大儀であった!南雲ハジメ!此度の貴様の功績に褒美を取らせよう、手を盃にするが良い!」

その声でハジメはハッと我に帰り、両掌を水を掬う時の様に盃にす

る。そしてその上に金銀財宝が降り落ちる。
あまりの重さに腰が引けるまで、ハジメに対する〝褒美〟は続いた。そして最後に美しい真っ白な陶磁器の猪口をポケットに押し込めると、漸く終わった。
その後、ハジメは渡された〝褒美〟の品々を一度しまう為に自室に戻り、訓練施設への往復を終える頃には訓練も佳境で、残りの僅かな時間を見学して過ごした。
重大発表とは、明日に【大迷宮】へと訓練の一環で遠征する事だったが、徹夜に徹夜を重ねたハジメには割とどうでも良い事に感じ、疲れをベッドにぶつけるように、眠りについてしまった。

【幕間】オルクス大迷宮

翌日、ハジメ達勇者の一行は【オルクス大迷宮】の入口がある広間に集まっていた。広間には様々な露店や屋台が犇めき合っていて、文字通りのお祭り騒ぎだった。

本来、ハジメが此処に来る筈では無く、ギルガメッシュも最後までハジメの参加を渋ったが、ハジメには過剰とも言える程の護衛と安全確保を義務付け、五階層以降への探索も禁止された。

【オルクス大迷宮】において、歴代最高の踏破階層は６５階層。それも百年以上前の記録であり、今では４５階層を越えれば超一流、２０階層でも十分一流だと考えられている。

ハジメがギリギリ許可された五階層未満というのは、死者数ゼロとなっている階数だ。と言うのも、オルクス大迷宮は整備がしっかりとされており、受付で冒険者のレベルやランク、天職で階層数を決定している。

駆け出しの初心者冒険者が惨殺されたという事件から、急遽整備されたのだと言う。

それに加えて、ハジメには大量の護衛と回復職が側に付いている。誰もがハイリヒ王国で名を轟かせる超一流の者達だ。ハジメが掠り傷を負おうものなら、最大級の術式で回復魔法が飛ぶだろう。

そうして、ハジメ達は迷宮へと歩みを進めていく。

迷宮の中は、広間との対比を図ったかのように静かだった。

勿論、迷宮の中が飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎだと思ってはいない。むしろそんな迷宮があったら逆に怖い。それでも迷宮の印象を尋ねられたのならば、「静か」と言う他に表現する事が見つからない。松明や照明の類こそ無いが、ぼんやりと視認する事は可能だ。緑光石という名称の鉱石が所々に埋め込まれているのだと、[鉱物系鑑定]の技能で分かった。

はぐれる事が無いように、一行は隊列を組んで進む。噂に聞く魔物

は現れず、次第にクラスメイト達の気が緩んで談笑の声が少しずつ増えていく。
良く言えばリラックスしていて、悪く言えば緊張感が薄れている。暫くそのまま歩いていると、広間に出た。
石で覆われたドームのように天井は高く、耳をすませば空気の通り道を辿れる微かな空気音が鳴っている。
一行が物珍しく、辺りを見ていると壁の隙間から大量の灰色の毛玉が飛び出してくる。

「ラットマンだ！昨日話した通りに動け！相手は俊敏特化だ！」

灰色の体に赤い目が光る。名前のラットの部分を象徴する様にネズミに近い外見をしているが、４足ではなく2足歩行。そして上半身はボディビルダーのようにムッキムキだった。
そのアンバランスさと言うか……夢の国を生息地とするネズミとは比べ物にならない程の気持ち悪さに、前衛に配置されたクラスメイト、主に女子達が顔を引き攣らせる。
それでも、やはり1階層の敵と言う事でそこまで強い訳では無い。剣で裂かれ、魔法で焼かれ、拳で吹き飛ばされる。大方一方的だった。
そんな中、一匹のラットマンがハジメの方向へと向かって来る。腰元に携えたナイフを引き抜き、初撃を躱そうとバックステップを踏もうとした途端、銀色の閃光がハジメの前を走った。
すこしそれが眩しくて、目を一瞬だけ細めた。その後に目を見開くと、先程のラットマンが息も絶え絶えになっている。

「どうぞ、止めを刺して下さい」
「あ、ありがとうございます……」

ラットマンを切ったのは、ハジメに付けられた過剰なまでの護衛の一人。
銀髪長髪の典型的なイケメンで、剣に付着した血を払って鞘の中に

収めた。息も絶え絶えに、立つことすら出来ないラットマンの側に立って、胸にナイフを突き刺す。キュー、とネズミに良く似た小さな悲鳴を上げてラットマンは事切れる。ほんの僅かに憐憫を抱いてしまった。

その後、五階層まで度々魔物とのエンカウントは起きたが、撤退したり誰かが負傷したりと言う様な事も無かった。そしてハジメは護衛がボコボコのフルボッコにした魔物に止めを刺して、着実に経験値を得ていた。

（パワーレベリングだよなぁ…）

レベルの高いプレイヤーから力を借りて、レベリングする方法。一部ではマナー違反とも呼ばれる行為にハジメのそれは酷似していた。ハイリヒに来る前、父の運営するゲームでも行われていた事。今に正しく自分がその立場にいるのだ。

それと、ハジメは気が付いていた。自分を見る酷く濁ったような、薄暗くて負の感情に満ちた視線を。

「じゃ、じゃあハジメくんも頑張ってね！」

「ありがとう白崎さん」

そして、6階層へと続く場の前で一行はハジメと別れる。一行はこれから20階層まで行き、そこで軽く実戦経験を積んでから戻ると言う。しかし、20階ともなるとまだまだ時間は有る。ハジメは五階層に残っては〝錬成〟の練習をしたり、レベルを上げたりした。

（……まただ）

不意に自分の背中を走るその視線に背をぞくりと震わせる。決して気持ちの良い視線では無いし、可能であれば向けられたくはない。

羊のようなモフモフした魔物の首筋を切り裂いて、一息つく。長く

息を吐いて、肺の中に湿った空気を送り込むと喉が少し乾いた。湿気を多く含んでいても、喉は潤されない。そう思うと、先程の長髪の騎士から一本の水の瓶を渡された。

「南雲殿、どうかされましたか？」
「え？僕ですか？」
「はい、先程から何かを気になされている様ですが」

そう言う騎士の目を見ると、負の感情や濁ったような暗い感情は無い。厳格で、純粋な瞳だ。

ハジメは、騎士に何か変な視線を感じると伝えると、騎士は驚きとも、笑いとも違う、納得したような表情を浮かべた。

「ああ、それはいけません。私の部下です」
「貴方の部下ですか？でも何で……」
「そう、大した理由でもありません。王様から出向いて褒美を貰った貴方に嫉妬しているんでしょう」
「嫉妬…ですか」

騎士の一人は何事でも無いようにそう言う。

イシュタルの恍惚とした顔からは狂信を感じ取ったが、この人達からも別の狂信具合を感じる。見ている人を不快にさせない分、こちらの方に好感は持てるが。

しかし成る程、やっぱりギルガメッシュには他人を強く惹く何かが有る。それこそカリスマ【Ａ＋】のスキルなのか。ともあれ、嫉妬は良い事じゃないんだけどなあ……双方に

魔物の躰を捌いて、魔石を取り出しながら会話を続ける。鉄の濃いにおいが鼻を刺すが、直ぐに慣れて何も感じなくなる。

魔石を取り出し、ポケットにしまおうとした途端。地を割るような大騒音が囂しく、ハジメ達の居る場所を揺らした。波が磐に打ち付けられたような、地を誰かが万力を籠めて割っているかの様な、そんな

音。
騎士や、回復職の人々が円環状にハジメを囲う。運の良い事に他の魔物まで怯えたのか、ハジメに襲い掛かる事は無かった。
長い尾を引く騒音の余韻。それから緊張感が走り、騎士の方々が話込む。
「一先ず、危険が有るのであれば南雲殿を退出させましょう。半数を護衛に残して半数をメルド達の元に合流させるべきです」
ハジメに水を渡した騎士がそう言うと、回復職と騎士が二手に分かれた。ハジメはその片方に合わせて5階層から上へと上がる階段へと足を向ける。
途中、何度か弱い魔物とぶつかったが大した脅威にはならず、着々と階層は戻っていく。そして二、三階ほど上がった所で、ハジメ達は甲冑の姿をした男を遠目から見つけた。それは香織達の一行に付き添っていた騎士の筈だが……
先程の長髪の騎士が一人で駆け寄り、何度か言葉を交わすと、分かりやすく顔を青褪めさせてハジメの手を引いて、風切り音は鳴る様な勢いで階段へと進む。
「どうしたんですか!?」
「トラップが作動したらしいです。早急に戻って王を喚ばねばなりません」
「トラップ!?」

トラップ
それは、【大迷宮】において最も警戒するべき事だ。
日本語にして罠の意であるソレは、高位の魔物とは比べ物にならない程の厄介さを持つ。魔物は階層によって大まかな生息地域が分かっている為、事前に回避する事が出来るがトラップはどうにもならない。
完全にランダムであるトラップ、鬼が出るか蛇が出るか、それは誰

にも分かる事が無い。故に最も厄介で、警戒するべきなのだ。

「でも！王様を喚ぶ程ヤバいんですか!?」

「ヤバいです、もう物凄く。ベヒモスだそうです」

ベヒモス、その言葉を聞いた周りの騎士も動揺を顕にした。

いくら上位世界で力を持つ天之川達でも、実戦経験は乏しく、レベルはまだまだ低い。レベルが上がればまだ分からないが、今では到底太刀打ちできないだろう。そして、天之川達が転移させられた先は石橋の上。この騎士は命からがらギリギリの所で逃げ切れたらしい。

皆を守るための騎士が、クラスメイト達を置いて逃げる事は非難すべきだが、結果として情報の共有が出来た事は良い事だ。

「では行きますよっ……！早急に王を喚ばねば……」

「待って下さい！王宮まで多分間に合いません！」

ハジメ達が居る【オルクス大迷宮】からギルガメッシュやエルキドゥが住まう王宮までは、歩いて行ける様な距離では無い。ハジメ達の移動も馬車で行った。

ベヒモスを倒す手段が有るとするのなら、ギルガメッシュ王かそれと同等の実力を持つ、親友のエルキドゥくらいだろう。しかしその二人も此処に来る事はできない。予想とは反しすぎた状況だ。

――私が南雲くんを守るよ

酷く、優しい声だと思った。

脳裏に浮かんだ、２４時間にも満たない程の過去。其処に自分と彼女が居た。簡素に言うのなら月下の語らいとも言おうか。

彼女は言っていた、夢を見るのと。やがて自分が何処かへ消えてしまう夢を見るのだと。

だから、【大迷宮】へ自分が足を踏み入れる事を彼女は拒んだ。南雲ハジメという人間が、消えてしまう事を恐れて。

最後には、彼女は自分を守ってくれると言った。

無能で、無価値で、無意味だと蔑まれた自分を。決して無能では無かった、非凡な能力を得た彼女が。
ベヒモスと言う、名も聞いた事しかない化け物。伝聞だけで伝わる程の恐怖の体現。ソレに彼女達は侵されている。
未だ、二桁から動かないステータス、震えては止まない小さな心。
――それでも

「〝錬成〟」

やるべき事を持っている。
言葉を紡いだ途端、感じるのは浮遊感。足元が消え去り体を支える二本の足が効果を失う。
上から、自分の名前を呼ぶ声が聞こえる。切迫した、驚愕を顕にした様な声。
「ごめんなさい」と心の中で騎士達に謝る。けれど、自分はこうしなければならない。そうでもなければ彼女に顔向けが出来ない。自分だけが〝無能〟という理由で逃げる事は出来ない。
戦闘職じゃない、ステータスが低い、皆の足元にも及ばない。
全ては紛れのない真実だ。
けれど、0が1より優れる真実はどんな世界にも無い。足手まといと言うならそれまで、けれど逃げる事は出来ないんだ。
軟着陸とは言い難い、着陸の衝撃に歪んだ尻骨を擦り、どうにかして立つ。クラスメイトの居る場所を知る手段。それは無いけれど、ハジメを無意識のうちに引っ張る勘が有った。そして酷く確信めいた物を、その勘は孕んでいた。
まだありふれた職業の、ありふれた能力を持つ、ありふれた少年は、閉鎖された競争に渦巻く洞窟を駆けて行った。

【幕間】オルクス大迷宮②

――地獄を見た

頭を割られ、血で地表を濡らし、息を失った者達。今もなおクラスメイトを襲う骸骨兵の背中。

叫び出したい様な惨状の中、酷く心だけは冷たく現状を受け止めていた。現実じゃなくて、夢であって欲しいと、強く願う事しか出来ない。そんな一抹の希望さえも、地を捉える両足が現実という事を瞬く間に呼び起こしてしまう。

誰かが叫ぶ、誰かが泣く、誰かが絶望する。

その光景をハジメは見つめる事しか出来ない。

――地獄を見た

知る顔も、知らない顔も、多くの者の命が転がる中に、現実という地獄を見た。

魔物が、ヒトが、自分自身が、終わりを持つ生物であるという実感。それと本能に刻まれた恐怖。

ベヒモス、それに伴う大量の骸骨兵。

怖いという感情が、こんなにも残酷で、こんなにも近いのだと改めて理解する。

心の底から爪先に至る全ての細胞が、命の危機を伝達して震えを引き起こす。一瞬前の決意を揺るがすような、ハジメの中で起きた小さな地震だ。

――地獄を見た

奪われた命があると言う事実が、何時かは理解しないといけない「死」は、最悪の状況で訪れた。

誰かの喧騒が煩わしい。誰かの慟哭に嫌悪感すら抱く。力を持っ

ている筈なのに、死を恐れて動く事すら出来ていない者達。
自分だったら、という馬鹿らしい考えと下らない憶測は意味を成さず、力を持ち得ない自分自身が酷く恨めしく思える。
その名前を付けられない様な感情を糧に躰は動く。
絶叫。無能の精一杯の咆哮だった。

「〝錬成〟!!」

地面が迫り上がる。そしてハジメの正面に位置していた骸骨兵が奈落へと身を滑らせた。幾つかの遺体と共に。
誰かが名前を呼ぶ、声が聞こえる。熱い地面の感触。それらを感じ取るより早く、骸骨の第二波が現れる。

「邪魔だよ！〝錬成〟!!」

変わらない手段で、奈落へと幾つかの骸骨兵が身を滑らせた。その隙に骸骨兵達の合間を縫ってクラスメイトの方へと駆け抜ける。
不意に、影が自分の背後に立つ。背中から走る寒気、全身から吹き出す汗。鉱物の様に固まった首を振り向かせれば、爛々と窪んだ目を輝かせて骸骨兵が、鈍い光を放つ鈍ら剣を振り上げている。
――死
それを確信して目を瞑る。が、訪れる事は無かった。

「大丈夫かしら？南雲君。」

骸骨兵の剣は、もう一方の剣によって止められていた。白崎香織の親友、八重樫雫の手によって
ハジメは冷静に、腰元からナイフを引いて骸骨兵の足を砕くようにして切り裂いた。バランスを失った骸骨は奈落の底へと姿を消す。

「どうして此処に来たかは問わないわ。香織は光輝達の所よ」

「ありがとう！」

骸骨兵へと立ち向かうクラスメイトは決して少なくない。次に自分の命が失われるかもしれないと言う危機が、急速にクラスメイト達の心を奮い立たせていた。骨が砕ける音を聞きながら、石橋の上を走る。

そして、その先に居る彼女の背

「白崎さん！」

「南雲くん!?」

石橋の上、バランスを崩して崩落しない程度に〝錬成〟を発動させて陥没させる。ベヒモスはそれに足を取られ、一瞬だけ時間が産まれる。

「南雲くん！どうして此処に……」

驚愕を全面に押し出した、その顔を見て安心感を第一に覚える。良かった、彼女は生きているのだと。その実感が何よりも嬉しかった。

「ごめん！後で話そう、天之川君！坂上君！一度離れて！」

二度目の錬成。それはベヒモスの右前足を捉え、動きと体勢を一時的に崩す事に成功する。

その間、前線でベヒモスに軽攻撃を加えていた数人が離脱して戻ってくる。彼らの目に映る驚愕の視線が何十と突き刺さる。

未だ2桁しかない薄い魔力だが、ハジメには［魔力効率上昇］の技能があるため、少しはマシになっている。それも錬成に限られるが。

「後方から離脱したい！八重樫さんのおかげで一瞬持ち直してるけ

ど、数が多過ぎる！天之川君みたいな高火力で薙ぎ払って欲しい！」
「分かった！ベヒモスはどうするんだ!?」
「少し、一瞬だけだったら足止め出来る！」

錬成の落とし穴、ヒット・アンド・アウェイではなく遠くからの遊撃に伴う離脱をすれば、きっと時間稼ぎ程度なら出来る。

「無茶だ！南雲、お前には！」
「良いから！早く！」

ベヒモスの足が引き抜かれた。そろそろ限界だ。
地面に手を付いて〝錬成〟を掛け直すが、やはり長くは持たないだろう。土の崩れる音、鉱石が砕ける音、それらが急激に鳴り出す。再動は既にそこまで迫っている。
魔力の余裕はまだ有る。少なくとも足止めに必要な分は。

「坊主！」

そう呼ばれると、ハジメは背を引かれて体を反転する。そして背を引いた張本人のメルドと視線が交差する。
メルドは、ハイリヒ王国騎士団の団長であり、ハジメ達の訓練をつけていた人でもある。尤も、工房に配属されたハジメは殆ど話したことは無かったが。

「……出来るんだな？」
「はい、やらせて下さい」

真っ直ぐ、愚直に目を見つめる。
出来る。最弱で、誰よりもありふれた天職で、だけどここには一人しか居ない自分なら、足止めは出来る。あくまで確信と言う仮定の中だけれど、信じて疑っていない。

「光輝達が道を拓く。1分……欲を言うと2，3分欲しい」
「大丈夫です。やれます」

そう言ってメルドさんと目を見合わせると、メルドさんは大きく頷いた。そして声を張り上げて天之川達、前衛職の者達を撤退させる。

「待って！南雲くんは……南雲くんは!?」
「大丈夫、直ぐに戻るよ」

皆が下がる中、彼女は、白崎香織はハジメに泣きつく様にして服の袖を引いた。彼女の顔は泣き出す直前にも、怒りのあまりに言葉が上手く紡げない様にも見える。

磐が一つ一つ剥がれて乖離する音が大きくなる。きっと間もなく怪物は再動する。彼女を早く戻らせなきゃいけない。そうハジメは思った。

「あっ、そうだ。白崎さん」

遂に怪物の四肢は解き放たれた。この場に立つのは既にハジメと香織の二人だけで、二人の持つ4つの耳を打ち破るような狂音が怪物の口から放たれた。怒りを強く含んでいる発声だった。

［言語理解］の技能を持ってしても理解は出来ない魔物の言葉。いや、きっと言語とは呼べないモノ。それが酷く心を殴り付け、心を打ち震わせる。

その啼声に、不安や恐怖に酷似した感情が巻き起こる。しかし、自分がするべき事は既に決めてしまったのだ。その実感と、感情を無理矢理に奮い立たせる為にも言葉を作る。

「足止めをするよ。でも、別にアレを倒しても構わないんだろう？」

そう言って、ニヤけてしまう自分が居る。
転移先で出会った、憧れにも似たモノを抱いた王様。それに出会い、言葉を交わしたという真実は未だに実感が沸かない。
それでも、その事実は全くもっての事実で、目の前で見た圧倒的な「王」としての威厳と、手元に残る莫大な財の一端がそれを現実味を帯びさせていた。
そして自分の状況が、決して叶うことの無い相手の足止めを務める事が、酷く知っている状況に酷似していた。そうであれば為す様に言っても良いだろうと思う。
正義の味方なんて大層な目標も持ってないし、それに見合うような力も授からなかった。
この言葉は、きっと自分の気持ちを立たせる為に言った言葉だった。
彼女の返答を聞く間もなくベヒモスは動き出す。彼女を手で後ろに下げて地面に手をつける。

「〝錬成〟！」

再動したベヒモス、今度は埋め落とすのではなく、覆う。
ベヒモスの両足が付いたタイミングで〝錬成〟を発動させて、地面から四肢が覆われる様に薄い岩の膜を張り巡らせる。
体から抜け落ちていく魔力の不快感を誤魔化すように声を張り上げ、筋に力を込めて地面を掴む様に力を込める。

「〝圧縮錬成〟!!」

［錬成］の派生技能である［圧縮錬成］。それをベヒモスの上から掛け直す。
薄い石の膜が圧縮され、ベヒモスの四肢をキツく締め付ける。岩の隙間から血が数滴滴り落ち、錬成した岩の膜を赤く染める。
これで、ベヒモスの両足は封じた。そして仕上げだ。

「〝高速錬成〟！」

［高速錬成］それを天井に向けて発動させると、ハジメの立つ石橋から天井に届く一本のポールが生まれた。

ハジメはそれを握り、もう一度〝錬成〟を発動させる。今度は天井伝いで。

枯渇が迫っている魔力、それを嫌という程感じながら行った最後の錬成。天上を構成する鉱物が形をゆっくりと変え、鋭く、刺し穿つ様な形へと変わる。

尖った大量の突起を一点に集中させる。狙いはベヒモスの脳天だ。細く、鋭く、そして早く。石の膜が、破れるより先に――

「〝錬成〟！」

魔力が間もなく尽きる、その確信は間違いなく必中するだろう。現にハジメの体からは魔力が抜け、体から見えない力が抜け落ちていく感覚で一杯だ。

痙攣する指先をもう片方の震える手で抑え、魔力を流し続ける。愚直に、ただ一点だけ、其処に説明のつかない力を流し込んでいく。

そして――

「〝錬成〟!!」

喉から振り絞った掠れた叫び。それでも役割を果たし、天井に形成された巨大な鏃を天上から切り離した。

岩で形成された巨大な鏃は法則に従い、ベヒモスの胴体へと向う。落下の中で起きる加速のエネルギーを伴って、武器としての役割を果たす。

硬い物が互いにぶつかった衝撃音が響く。その衝撃音と伴って石橋に衝撃が加わり、大きく揺さぶられる。

その衝撃が収まると、ハジメの目前には鏃を背負ったベヒモスが見えた。貫く事こそ叶わなかったが、皮膚の装甲が割れて、錬成した鏃が背に突き刺さっている。

魔力に余裕など既に無い。叶うことなら今直ぐに寝転んで、この疲労感から沸き起こる強烈な眠気に体を委ねたい。

しかし、こんな場所で睡眠を取るなど自殺するのと何も変わらない。ハジメは石橋を急いで引き返す。汗が身体中に湧いて気持ちが悪い。額の汗が幾つか目に入る。バクバクと煩い程に生を実感させる心臓を押さえ、荒い息のままに全速力を崩さない。背後から絶えずに聞こえるベヒモスの鳴き声が一層、恐怖を生み出し足に入る力を加速させる。

前を見れば、クラスメイトの多くが隊列を組み、ハジメを待つようにして並んでいる。

どうやら撤退は問題なく行われた様だ。

詠唱を唱える者の一人には、昨日のこの頃にハジメを虐め、嫌う檜山大介の姿もあった。檜山の心の内に渦巻くのは、ハジメの帰還に対する歓喜でもなければ、ハジメに対しての嫌悪でもない。

それは嫉妬だった。

檜山こと、檜山大介は白崎香織に好意を抱いている。しかし、彼の好意は決して彼女に届く事は無いだろう。

その理由は、偏にハジメの存在。白崎香織が南雲ハジメに好意を抱いていると言うのは、クラスメイトも心の何処かで勘付いており、事実でもある。ハジメと香織が出会ったのは高校に入る前、そして一瞬の出来事だった。

それ故に、事の真実を知るのは当事者の香織、そしてその出会いを耳にタコが出来る程聞かされた親友の八重樫雫のみ。

それでも、檜山には納得が行かなかった。檜山はハジメが自身の下に位置する人物だと信じて疑わず、その人物が香織に好意を抱かれていると言う事実が何より苦しめた。

その苦悩は、ハジメへの怒りに変貌する。

逆恨みだと、客観的に考えれば分かる事だろう。それでも、檜山に

は到底受け入れ難い真実で、あまりに重かった。
そして、檜山の内側から悪意が形を成し、現れる。
ハジメは、それに気が付く事が出来ない。いや、出来なかった。
多くの魔法が、ハジメの頭上を越えてベヒモスに襲いかかる。クラスメイト達は時間稼ぎを買い、自ら窮地に飛び込んで来たハジメに対して、恩や感謝の念を少なからず抱いている。この魔法群は、その想いが多少なりとも詰まっているのだろう。そう、
――ハジメへと飛来する火球を除いて
ベヒモスへと向う魔法、その一つは方向を変えてハジメへと襲いかかったのだ。
どうして、と
ハジメはそんな気持ち以外は抱く事が出来なかった。突然の出来事に、脳は動きを停める。
一度、ハジメはその衝撃に耐えた。石橋の上の突起に手を伸ばし踏ん張るが、体の所々を強く打ち、走る事など到底出来ない。それでもハジメはフラフラになりながら歩き、石橋を渡ろうとする。
その途端、石橋が倒壊を始めた。
後続のベヒモスの重量、そしてクラスメイト達の放った魔法が衝撃となり、ハジメの後ろから倒壊を始める。走らなければいけない、でも体の負傷でそう行かない。

「南雲くん！」

誰かが、そう言った。酷く、優しい声色で。
――行かなきゃ
義務感にも等しい、沸き起こった感情。
戻らなければいけない。彼女を悲しませてはいけない。そんな感情だけは未だ尽きず、ボロボロの体を動かす原動力へと変わる。
身体中の火傷、打撲、器官の損傷。それでもハジメは歩みを止める事はしない。
けれど――

橋の倒壊は止まる事をしない。
一つ一つ、足場は失われて行き、何一つとして残る事はしないだろう。
希望が、失墜する。
――嗚呼、駄目だ
その声を最後にハジメは完全に途絶えた。
躰は、落下を始める。法則に従い、当たり前のように奈落へと落ちていく。
その頃、外では空に一筋の流星が流れた。
透き通った空、それでもまだ日の在る時刻のため、見る事が叶った者は決して多くない。
空に流れる、名も無い星屑の落下。
人は、それを凶兆と言った。

王、策を練る

南雲ハジメが奈落の底へと落ちて行く。
その光景を、その場に居た者は全員が目に入れていた。
崩れ落ちる石橋、その欠片が瓦礫となって奈落へと向う。その光景の中に南雲ハジメも居たのだ。それでも、誰もが手を差し伸ばす事すら出来なかった。人として設計されている以上、情報が混雑を起こしてしまう。
しかし、ヒトの脳は非常に優秀だ。ハジメの姿が奈落へと消え、ベヒモスの断末魔が一片も響かなくなった途端に、漸く今の状況を理解する事が出来た。

「守らなきゃ……」

最も早く冷静になったのは白崎香織だった。
ハジメに惹かれ、月下の元で確かな絆を結んだ彼女。本当だったら今直ぐにでも叫び出したい様な残酷な現実。
しかし、彼女は目の前の状況に向き合うだけの精神力を持ち得ていた。それは偏にハジメに対する親愛と狂愛。白崎香織は何の躊躇いも無く、石橋があった虚空に向かって走り出す。
その様子にメルド、そして天之川たち仲の良い集団が正気に戻り、香織を行かせてはいけないと言う思考に至る。それでも、思考は思考のままで、現実にはならなかった。

「香織！駄目！」

動けたのは、たった一人だった。
長く後ろに結われた黒髪の纏まりが、無風の空気を泳ぐ。その持ち主である八重樫雫は、親友の細くて酷く女性的な体を強引に背後から抱き締めた。
八重樫雫は知っている。香織が中学生の頃、偶々ハジメと出会い、

並々ならぬ想いを持って惹かれていた事に。
けれど、この場で奈落へ行く事に一体なんの意味があるのだろう。どれだけ運が良く、特殊な力を得ていようが、人間なのだ。心臓を抉られれば死ぬし、空を飛ぶ事が出来なければ死ぬ。
「嫌だ！離してよ！南雲くんは私が！」
「守らなきゃ」その言葉は続かなかった。何故なら彼女の意識は強制的に現世から剥離されたからだ。
意識を失い、一人で立つ事も出来ない親友を昏い気持ちのままで運ぶ。
八重樫雫には、洞窟の闇が、酷く濁った闇に見えていた。

「王よ……ご報告致します……」
その夜、メルドは王の執務室へと出向いていた。
幸いな事に、迷宮からの撤退中、強大な魔物に襲われる事は無く、長い道程ではあったが無事に撤退する事が出来た。しかし、メルドにとっての地獄はここからである。
メルドは、自身の仕える王の性格を一片は知っているつもりだ。尊大で、冷酷で、唯我独尊。しかし其れ等が許される程に強大。
現にメルドは王の姿を直視せずとも、心の奥から湧き出る畏怖の念に歯が揺れそうな気持ちだった。きっと、自身の背には紅の瞳からの視線が幾つも突き刺さっているのだろう。
「騎士2名、魔法師1名、そして勇者側からは2名が死者。メルド、貴様は我に泥を塗る事を生業としているのか？」
「滅相もありません……」

「であろうな。貴様の本業は剣を振る事だ」

呼吸が覚束ない。産まれた瞬間の赤子ですら懸命に泣いて呼吸をすると言うのに、メルドにはそれが出来ない。

体からは倒れるのでは無いかと錯覚する程の汗が吹き出す。着慣れない正装がベタついて不快感がする。

「まあ良い、貴様の裁きは後だ。明日に勇者全員を集めよ。先ずは最大の失態をした愚者を裁かねばならん」

「王よ……責任は俺、いえ、私に」

「責任が誰に在るか、それは明日に明らかになるであろう。もう下がれ」

そう言ってギルガメッシュはメルドを部屋から出した。そして数十秒後、誰も居なくなると大きく息を吐き、長椅子に寝転んだ。「やってくれたな」それがギルガメッシュの抱いた感想である。

エヒト直々に送られてきた勇者。故に勇者達は教会内でも間接的にだが崇拝されている。その死者の責任は監督の騎士、そして上の王国、つまり自分達に向かって来るには自明の理だった。

ギルガメッシュとしては、教会側に権力を握らせない。握らせてたまるか。と言う精神で行動していたので、教会側に一枚のカードを渡す事となってしまうだろう。とは言え、こちらには財力と言う最強のカードがある。大きな影響は無いだろうが、暫くは教会との睨み合いが続きそうだ。

これからの出来事を軽く予想し、深く溜息を吐きながら一層身体の疲労感を椅子へ吸い取らせる。まつ毛で目に入る光量を調整しながら光源を見つめる。

「……先に手を打つか」

そうして、考えが纏まったギルガメッシュは部屋を出た。

彼の目が猫のように細長く、深淵を覗いた様になっていた事を知る者は、誰も居ない。

夜は深い。
陽の名残も残滓も消え、熱の無い青白い月だけが浮かぶ夜。月明かりだけでは照らす事の出来ない場所というのも確かに在る。
勇者一行の一人、中村恵理が居る場所もその一つだった。召喚された大勢が宿泊する宿を出た街の一角。人は一人も寄り付かず、寂しさすら鳴る様な場所に彼女、中村恵理は居た。
しかし、月明かりも届かない深い一角には不自然な程に強く、溢れ出る様に光が跳ねている。その発生源からは一人の男が居るだけ。

「ぁ……！」

喉奥から出た掠れた音が夜に溶ける。声の発声主である中村恵理は、意図的に出した訳ではない、その声しか出ない状況にあったのだ。

「我に嗜虐の趣向は無いと思っていたがな、中々愉しい物もある」

愉悦に歪んだ微笑。その残酷なまでに美しい容姿の持ち主を中村恵理は睨み付ける様にして見上げた。
地に付いた両掌からは冷めきった熱がゆっくりと伝わり、手の熱が地面に奪われていく。

「……何さ、急に僕を呼び付けてコレかい？」
「ほう、それが貴様の核か」

中村恵理の印象を挙げろと言われれば、ハイリヒ、日本関わらずに

皆は口を揃えて「大人しい」や「素直で優しい」と言った言葉を挙げるだろう。つまりは何事も大舞台に出る事があまりない少女なのだ。
しかし今、中村恵理が持つ雰囲気を見て「大人しい」と言う者は居ないだろう。眼鏡の奥から覗く双眸からは、野心に溢れた、それでいて狡猾で理知的な光が波打っている。

「そうだよ。誤魔化してもダメなんだろう？王さま」

淡々と述べ、中村恵理は立ち上がった。それでも上背には大きく差があり、見上げるしか他がない。
昏い黒目と冷たい赤眼が交差する。しかし、その昏い目の奥には本能から訪れる脅えの感情も少なからず含まれていた。それでも、彼女の目に含まれた野心の光は消える事がない。

「我としてはだ。貴様等雑種が草を食もうが、肉を貪ろうが何とも思わん、好きにしていれば良い。だがな、我の手を噛む事だけは許されんのだ。」
「……それで？君は何を言いたいんだい？」
「我のモノになれ。中村恵理」

顔を極限まで近づけてその会話が行われた。
もし、この言葉がタイミングと場所が違えば、多くの者は傲慢な愛の告白だと受け取るかもしれない。しかし、その言葉には甘みに一片も無い事は、中村恵理が誰よりも分かっていた。
「モノ」になれ。つまり文字通り自分に従えと言う意。拒否権など与えられている訳がなく、反対したら容赦なく亡き者にされると、紅の視線は語っていた。
早い話、中村恵理はクラスメイト達を裏切る事を決めている。
同じクラスで過ごした仲間だと言うのに、何故こうもあっさりと冷酷な判断を下したのか、その理由はまた天之川光輝に在る。
彼女は幼い頃、両親から虐待を受けていた。そしてそれが原因で自

殺を考えた。
誰も仲間は居ない。誰も自分を必要とはしない。自分には居場所が無い。その昏い気持ちは、何時まで経っても心を支配して、埋め尽くしていた感情。
その絶望感から救った人物こそ、勇者こと天之川光輝なのだ。心の奥底から愛情を欲した彼女、そこに居た天之川光輝は余りにも鮮烈で、余りにも大きな存在だった。
しかし、天之川にとってはそうでもなかった。
天之川にとっての恵里は、救済するべき一人。それだけの認識で、彼自身は恵里の様に居場所を欲している訳でもなく、愛情を求める必要も無い。全ては与えられていた。
故に、天之川にとって恵里の救済は既に「終わり」を迎え、もう出て来る事は無い「済んだ」一人だった。
けれど、恵里には理解が出来なかった。自分を救ってくれるんじゃないのか。守ってくれるんじゃないのか。自殺を止められた時に掛けたれた言葉はただ愚直に、阿呆みたいに動いては止まない。
「どうして」その言葉が胸の中で数千と渦巻いた時、漸く彼女は理解した。
自分は、天之川光輝にとって、「特別」でもなんでもない、たった一人なのだと言う事を。
彼女に渦巻いたのは諦めでも、呪詛でも無い。ただただの嫉妬。
憎かった。いや、今でも憎い。天之川光輝にとって「特別」に位置する白崎香織が、八重樫雫が。憎くて憎くて羨ましくって。
憎さ余って可愛さ百倍なんて言葉は、よっぽどの聖人じゃなければ成立しない言葉だ。彼女に渦巻くその行き場のない嫉妬と妄執が、ただそれだけが彼女を形成しているのと同意義。
だから、この異世界召喚と言う出来事は彼女の最大のチャンスだった。
彼女が得た天職は「降霊術師」文字通り死した者の残留思念を読み取ったり、遺体を動かす能力。
これがあれば、きっと――ボクの物になってくれる。

それが、中村恵理の原点、そして歪みだった。

「それで？仮にそうして、君と僕には何のメリットがあるんだい？」
「情報が敵へと渡らない事、それが我の利点だ。そして我の指示に従えば褒賞としてあの男をやろう」
「それだけかい？悪いけど、相手側と同じだよ」
「そうか、であれば我があの男を殺す」

そう言うと、闇夜に黄金の波紋が浮いた。
そしてその波紋からは一つのガラス製のフラスコ瓶が飛び出す。フラスコ瓶の中身には橙色に輝く粉が詰め込まれていて、オパールを砕いた様に言葉にし難い、鉱物特有の浅い耀きを美しく放っている。

「知っておるか？この世で、人が変異して成る魔物を」
「……ゾンビ」

ギルガメッシュが取り出した宝具。地球発の宝具で、ゾンビパウダーと呼ばれる。
その起源はナイジェリアの少数民族からで、ブードゥー教の死者蘇生の儀式で用いられると言われている。所謂都市伝説だ。死者蘇生とは言うが、決してそれは慈心から来る物では無い。寧ろその逆で死を持ってしても収まらない咎を裁く為、死者をより辱める為に行われる儀式なのだ。
ハイリヒでもゾンビの存在は知られている。しかしその違いは仮想（フィクション）か現実（ノンフィクション）かの違い。
ハイリヒにおいてゾンビは魔物の一種と言う認識だ。朽ちた死体が空気中の魔力を取り込む事で変異する魔物で、白骨化していればゾンビとはまた別の魔物に成る。ハイリヒは日本同様、葬儀は火葬なので死者がゾンビになる例は少ない。冒険者が魔境に足を踏み入れ、そのまま死亡する事が主なゾンビの発生理由だ。

「実在のゾンビを見た事は無いだろう、アレは酷く不快な物だ。体は朽ちて変色し肚から臓物を垂れ流しにしておる。貴様の愛する男も、そして貴様自身も、我の手が一つ違えればそうなる運命に在るのだ」

その言葉に恵里は沈黙を守った。ギルガメッシュは彼女の特性を早い段階で看破し、彼女が裏切る事の無い様にする最適解をとっくに導き出していた。与える事も出来る。けれど自分は奪う事も同じ様に出来るのだと、自分に益を齎せば与え、自分に歯向かえば奪う。それが最も生産的だし、効果の有る方法だ。

「分かったよ。と言うよりそれしか道が無いからね」

「そう不満を言うでない。我は手に入れたモノは懇切丁寧に扱う主義だ」

それっきり、二人は何も言う事は無かった。

「良い夢を見ると良いな」

去り際にそう言われた恵里は心の中で一つ舌打ちを零した。

今日見る夢は、きっと喧しい程にキラキラしていて、とても眠る事は出来ないだろうと、勝手に心の中で思い。再び闇夜へと二つの人影が溶けた。

王、そしてオカン

呑気な鳥類が朝を告げる。
地球であれば鶏がソレに当たるがハイリヒでは似て非なる鳥が代わりを務める。ハイリヒの朝はそれから始まるのだ。しかし、無慈悲な事にこの鳥もまた食用、悲しい摂理である。
天之川達、勇者一行が宿泊しているのはハイリヒ王国きっての高級宿泊施設。目覚まし時計など無い為、大抵の者はこの鳴き声で起きる。
だが、大迷宮から撤退したあの日以来、目を覚まさない者が居た。
白崎香織、彼女だけは4日を越えた今でも死んだ様に眠っていたままだった。
美しく瞳を閉じ、意識を喪い続けている親友の手を八重樫雫はそっと握る。雫の心の内には複雑な思いが渦巻いている。早く目を覚まして欲しい、しかし目を覚まさなければ彼女が傷付く事は無いだろう。その境界で、彼女は揺れていたのだ。
クラスメイト達の雰囲気も悪い。いきなり転移した異世界に浮足立っていた様な明るい雰囲気も、人の「死」を目の当たりにして、これから起きる事に不安と恐怖で一杯になっている。

「……ごめんね、香織」

きっと、何一つとして彼女には聞こえていないだろう。それでも謝罪の言葉は罪悪感から産まれる。
あの場所で、南雲ハジメに行く事を許したのは自分だ。その判断は間違ったとは思わない。現に、彼のおかげで犠牲は最小限で済んだ。それは紛れのない事実だ。
けれ、クラスメイトは誰一人として彼に感謝も、憐憫も伝えない。南雲ハジメを死へと追いやった〝流れ弾〟が〝自分の魔法だったら〟と言う脅えに面して声を上げる勇気も無い。

「……うん、分かってる。そうしなきゃだよね」

八重樫雫は歩き出す。

きっと――その行動が正しいのだと信じて

ハイリヒ王国、王宮。

原則進入禁止で、ハイリヒ王国を代表する巨大建造物の一つ。今代の王、ギルガメッシュによって真新しく中心に造られた豪華絢爛を具現化した様な建築物。不思議な事に、宮殿の建築中には税が一ルタも増えなかった。王自らの設計と言う事もあり、観光目的で見物をする者も少なく無い。それでも内部を見ることは叶わない為、その内室は民の出鱈目な噂と都市伝説が出回っているばかりだ。

そこに、八重樫雫は入っていた。

勇者一行には部分的に王宮へと入室する事を許されている。

流石に執務室や、王の自室へ入る事は出来ないが、中庭で鍛錬に勤しんだり、応接室で上質な茶を嗜む事は出来る。とは言え八重樫雫が求めている事はどれにも当て嵌まらない。彼女が王宮へ向かった理由はただ一つ、ギルガメッシュに会う為だ。

しかしながら、ギルガメッシュは巨大な一国の王。そう面会を希望した所で出来る訳では無い。それに加えて王宮内は漠然とした造りになっている。一回来たからと言って覚えられる物でもないのだ。

早い話、八重樫雫は迷子気味だった。

右へ行ったり左へ行ったり、階段を降りて上がったり、そんな単調な作業を繰り返した足は悲鳴を上げる。こんな事になるのならメイドに付いてきてもらった方が良かった。そう悲観的でどうにもならない後悔をして、思わず床に座り込んでしまう。

足に乳酸が貯蓄されていく感覚。苦痛を伴った快感が脹脛から太ももへと伝わって行く。体感では既に1時間も歩いた様な気分で、雫からすれば価値の分からない複雑な形状の銅像の表情が煽っている

様でムカついた。長いこと歩いた廊下だが妙な違和感も感じるし、床の居心地は良くはない。

「おや？君は誰だい？」

その直後、雫の目の前にきょとんとした様な表情を浮かべた人物が現れた。慌ててそのまま立ち上がり、その人物と目を合わせる。緑の美しい長髪を持った人物で、白い服をブカブカに着ている。何処か儚さを思わせる美人で、何十、何百の上に成功した芸術品の様な、そんな美しさを誇っていた。

雫は少し反応に遅れ、目の前の人物が侍女でもなければ貴族でも無い、何者にも属さない人物である事に疑問を覚えた。

「おっと、人に尋ねる時は自分からだったね。僕はエルキドゥだよ」

そんな彼女の困惑を知らずか、目の前の人物はエルキドゥと名乗った。何者かは分からないが、一先ず敵性は無いのだと分かり、雫も少しばかり安堵する。

「私は八重樫雫です。初めまして、エルキドゥさん」

「それじゃあ君が異世界から来た子なんだね？初めまして、会えて嬉しいよ」

彼女？はそう言って心底嬉しいと言う様に表情を綻ばせた。裏表のない、他意が全く含まれない心からの笑顔に心が少し軽くなった気がする。

「それで、此処には何の用事かな？」

「えーっと……ギルガメッシュ王に会いたくて……」

「そうなんだね、じゃあ行こうか」

そう言うと同時に、雫の視界がブレた。体の表面から空気を切る風の清涼感が同時に流れ込んでくる。行ったり来たりした宮殿の風景はどんどんと流れて行き、雫は自分が意思を持たずに宮殿内を移動しているのだと、少ししてから理解した。

「エ、エルキドゥさん!?」
「呼び捨てで良いよ！はい到着！」

不意に景色の線が止まる。そして体に迫る空気も消えた。目の前には自身の背丈を遥かに上回る巨大な二枚の扉があり、「入室厳禁」と金の張り紙がされている。雫は恐る恐ると言う様に扉へ近付き、入室を伺う様に扉を叩こうとした、途端。

「ギル～！お客さんだってさ！」

扉は豪快にブチ開けられた。エルキドゥの手によって。
その瞬間、八重樫雫は何が起こったかの順序思考が出来なかった。勇者一行と言う肩書きがあるとは言え、礼節を欠けば普通に呆れられるし、怒られる。今の状況を地球で例えるなら、首相官邸に殴り込みに行った様な状況なのだ。叱られないと言う事は無理な話だろう。
そんな事で心をビクビクさせていると、恐れを知らないのか、エルキドゥはズカズカと部屋に上がり込み、視界に移っていた金塗りの巨大な二人がけの長椅子に座った。雫が呆然としていると、空いた左側をポンポンと叩き、「おいで？」と無言で伝えてくる。

（行ける訳無いでしょう!?）

心の中で雫は絶叫した。一体、何処の世界に最高責任者の部屋に無言入室した挙げ句、座り込む神経の図太い人が居るだろうか……否、目の前に居る。目の前にその神経が図太いヒトが居る。
とは言え、雫は周りと比べて常識的ではあると言う自負がある。雫

には今、ズカズカと部屋に入り込むだけの勇気は無かった。

「何をしておる。さっさと入れ」

その雫の躊躇を感じ取ったかの様に、もう一つの声が空を鳴らした。エルキドゥを、鈴が鳴る様な凛澄んだ声だとすれば、この声は極限まで張り詰めた弦を鳴らした様な声。張り詰めた、その中で他を圧倒するこの上ない力強さを含んだ声。

一度聞けば、そう簡単には忘れる事の出来ない。ギルガメッシュの声だ。

「し、失礼します！」

その声に弾かれる様に、雫の両足は動いた。それでも日本の行き届いた情操教育からか、一言を付けて述べてから大きく開いた扉を潜った。部屋の中を見渡す様な事はしなかったが、部屋の造りは大体分かる事が出来る。

先ず、目に入るのは巨大な玉座だろう。立った成人男性を越えるほどの大きさを誇り、両方の腕掛けには純金の金箔が輝いている。その背後にはこれまた巨大な本棚が幾つも並べられ、所狭しと図鑑並みの本が並べられている。

エルキドゥが座った長椅子はエナメルのわざとらしい輝きでは無く、控えめな本物の輝きを持っている。

「我の時間を割く。それは何十、何百の宝物を貢いだ者さえ叶わぬ事」

ギルガメッシュは玉座で頬杖を付きながら淡々と述べる。片手には薄い石版を持ち、雫とエルキドゥは意識の外に有る。それでも声色に秘められた暴力的な魅力は、冷情は、決して消える事が無い。

数えるのも億劫になるほど言葉を交わしたエルキドゥは兎も角、一度も会話らしい会話をしなかった八重樫雫には荷が重い程の重圧が

音もなく襲う。その無垢な口撃に、雫の体を覆った皮膚からは汗が吹き出しては止まない。

「故に、貴様との会話には財以上の価値が有るのだろうな？雑種」

石版から、視線が外れる。そして眼を覗かれる。

体の内側から全てを見通された様な感覚。ただ視線が合っただけで陥る緊張と言う状態。

目は口ほどに物を言う。日本ではそんなことわざが有る。目で伝える情は口で伝えるのにも劣らないと言う意、ギルガメッシュの目に映る情は、雫を責める訳でも、慈愛を掛ける訳でも無い。只々、居る者として捉えているだけ。

この人物の前では他の者が脅威になる事は愚か、興味を引く事すら無くて、高貴な血筋すら持ち合わせない狗、雑種に等しいのだ。

でも、それっきりだ。

幼馴染（天之河光輝）や親友（白崎香織）の尻拭い、その何年に及ぶ苦節に比べれば一瞬の事だ。

「今日は、お願いが有って来ました」

声が出た。メルドですら過呼吸を覚えた重圧の中で堂々と。

正義感で動いて後先考えない幼馴染（天之河光輝）に、想い人をストーキングする親友（白崎香織）。それらに何年と振り回され、胃に穴を開ける様な思いをした。時にはストレスで頭痛が止まらない時もあった。

それでも生来の面倒見の良さからか彼等に付き添い寄り添い続ける、人はそれをオカンと呼ぶ。

「ほう、我に直接会ってまで何を望む？申せ」

「クラスの、私達の戦争の参加を志願制にして欲しいです」

重圧が、より強くなる感覚。

ピリピリとした静かな痛みが全身を走る。ギルガメッシュと目を合わせる事はもう出来なかった。体に視線が突き刺さる、その分かりきった事実が胸に動悸を走らせる。

「魔人族との戦争、それに参加すると言ったのは貴様等では無いか。今更それを撤回させろと言うのか？」

「南雲くんが死んで……クラスメイトの皆の多くは意気消沈しています。この状況で皆を戦争に参加させる事は得策とは思えません」

「それが何だ、戦争では更に多くが死ぬ。当然の摂理だ。一人が死んだ所で、貴様等はそれを知っていた筈だろう？」

言い返す事は出来ない。ギルガメッシュの言葉は全てが正論なのだから。

戦争という事において、日本以上に教育が施されている国は稀有だろう。地球で唯一核爆弾の被害を受けた国であり、それを二度と起こさない、二度とこの悲劇を繰り返してはならないと言う負の遺産として、戦争の凄惨を語り、１２歳にもなれば学ぶ。

日本において、戦争は紛れの無い「悪」だった。

正義を掲げ、正義感で動き、自分を正義だと信じて疑わない天之河光輝は、あの日――「悪」に助力すると言ったのだ。後悔先立たず、後の祭り。戦争は嫌だ、けれどソレが完結しないかぎりは地球に戻れる保障が無い。

だけど、どうしろと言うのだ。一介の高校生でしか無くて、特別な力が与えられたからと言って日常的に誰かを傷つける事も無くて。

雫は、恨まずには居られない。

何故、私達を選んだのか。大人と子どもの境界に立っていて、まだ全ての事も学び終えていないと言うのに。

虫の良い話だと、分かっている。それでも雫は頭を下げる事しか出来なかった。

「ねえギル、僕としては彼女の提案に賛成だけど」

そんな沈黙を破ったのはエルキドゥだった。無邪気で無垢なその表情を理知的に俯かせ、心做しか引き締まった様にも見える。雫は今、エルキドゥの正体がギルガメッシュと唯一平等に話せる親友であると知らない。なので突然話し始めたエルキドゥには少し驚いた様な表情を浮かべた。

「ほう、何故そう思う？エルキドゥよ」
「だってさ、戦えない人達は邪魔だもん。それに神の使徒で通ってるんだから、死んだらギルにも影響があるかもしれない。だったら戦える人に戦って貰った方が良いよ」
「満点だな、バターケーキをやろう」

徐に黄金の波紋が浮き上がる。そして一切れの黄色と茶色の断層を持つふわふわのケーキ生地が、ギルガメッシュの手で形を変え、エルキドゥの口元へと運ばれた。

「今の通りだ、伝えておけよ小娘」
「……ありがとうございます。それと光輝が、クラスメイトがすみませんでした」

話はそれで終わった様に見えた。しかし雫にはもう一つだけ話す内容があったので、それに続けて言葉を紡ぐ。

「南雲君が死んだ事を、死んだ原因を知っていますか」
「我が聞いた限りでは魔法の誤操作の流れ弾と聞いた」

ああ、やっぱりそうか。それで通ってしまったのか。違う、南雲くんの死は明確な意図があって起きた事なのに。
八重樫雫は全てを見ていた。あの火球は、あの魔法は――

「火球は、南雲君を殺した魔法は――檜山君の物でした」

ああ、言ってしまった。黙っていればきっと今のままでいれたのに。

南雲君は事故で死んだ。誰も悪くない。そうしてしまえばどれだけ楽だっただろうか。未だにアレが見間違いであって欲しいと願う。認めたくは無い。そうであって欲しく無い。それでも見た物は全てが現実で。

悩んだ。一人で悩んだ。

黙っている事も本気で考えてしまった。人間的に醜いと分かっていても、そうすれば誰も悪く無くて終わる。

だけど、それでも、未だに眠っている親友が、まるで自分の選択を見守っている様な気がして――

「お願いします……そうじゃなきゃ、きっと納得出来ない人も居ます」

「……良くぞ言った。貴様の勇有る言告、確かに聞いたぞ」

その言葉を終えた途端、雫の心は少し軽くなった様な気がした。

隠し事をしていれば、その分何かに影響が出る。何れバレると脅えを孕んで生きていく事は決して精神衛生上良くない。バターケーキの甘い粉末が付着したギルガメッシュの手を舐めるエルキドゥに、雫は心の底から感謝を覚えたのだった。

「だからね、ギルはツンデレって云う部類なんだよ。本当は皆と仲良くしたい筈さ」

その帰り道、雫はエルキドゥと話しながら王宮の廊下を歩いていた。

帰り道では王宮の隠れ通路の申し子、エルキドゥが雫を出口まで送

る事となっていて、行きの時の様に右往左往する事は無い。それでも5、10分では辿り着けない辺り、この王宮の馬鹿げた大きさが分かると言う物だろう。

（あら、この絵は初めて見るヤツね）

廊下に等間隔で置かれた装飾品、雫はそれらを一通り見たつもりだったが、まだまだ見ていない物も当然ある。

雫達が元居た地球で、世界最大規模の博物館である故宮博物院に収められていた美術品は凡そ70万点。それに対してギルガメッシュが持つ宝物庫内の美術品は軽く1000万点を越える。

壁画など、大き過ぎたり諸事情があって飾れない物もあるが、大抵の物は飾られているのだ。

雫が目にした絵画では、カワセミが黄金の川を泳ぐ魚を密かに狙っている。そしてその隣は抽象画、その隣は騎士像で……

ああ、なるほど。

違和感はこれだったか、雫は納得を漸く得る事が出来た。

その違和感は単純明快、「神」をモチーフとした装品が一つも無いのだ。

ハイリヒの地に召喚された時、教会には当たり前だが神の絵画が有った。雫が泊まっている宿にも、街中でも、適当に目を走らせればエヒトをモチーフとした物は目に入った。

エヒト様は人類の九割が信仰している。

イシュタルは、召喚されたクラスメイトの前で堂々とそう言った。そして紛れの無い事実だとするのなら――

あの王は、その「信仰していない」一割に入るのだ。

王、そして愚者の行末

部屋に残された我は一つだけ溜息を吐いた。
エヒト(抹殺対象)から送られてきた戦力が高校生で、しかも同士討ちして、そして意気消沈して退場。

「何をしに来た……」

思わず本音が漏れる。正直に言えば、来ても来なくても変わらなかったまであるぞ？まあ、これ以上問題が増える前に退場してもらえたのはありがたい所だ。３０人程度なら余裕で養える。
そんな愚痴混じりの思考を玉座の上でしていると、背後の本棚がクルリと一回転してエルキドゥが出て来る。

「そう易々と隠し通路を使われても困るのだが？エルキドゥよ」
「ゴメンね、こっちの方が楽しくて」

その言葉とは裏腹にエルキドゥの顔からは反省の色が見えない。きっとまた隠し通路で王宮内を移動し回るのだろう。その設計はエルキドゥの遊び場では無く非常用なのだが……
本棚が回転して隠し通路、又は隠し部屋。映画で死ぬ程見て憧れた構造の一つでもある。隠し部屋を作った所で、シドゥリやエルキドゥには絶対にバレるので、隠し通路にした。こんな風に王宮には万が一(遊び心満載)の為に大量の隠し通路を作ったのだが、エルキドゥの遊び場と化しているのが現実だ。

「彼女、良い子だったね。僕としても気に入っちゃった」
「胆力が座っていたな、他の者よりマシなのは認めざるを得ん」

そう言う我だが、心境的にはあの八重樫雫と言う少女の株価は大高騰している。

我じゃあ想像出来ないがギルガメッシュを前に自分の要求、それもクラスメイトの事を考えて、尚且目にした事をちゃんと伝える。
敵に立ち向かう事はとても勇気のいる事だが、仲間に立ち向かうのはもっと勇気のいる事だ。
そんな言葉がある。それ程に彼女の勇気は素晴らしい物だと思う。

「それでさ、檜山だっけ?を捕まえるのは何時にするんだい?」
「間も無くだ、逃げられても困る。早いに越した事は無いだろう。エルキドゥも来い、頼む事があるからな」
「じゃあ隠し通路を通って……」
「中庭だ、疾く行くぞ」

我がそう言うと、エルキドゥは不満そうに口を尖らせて我の後に続く。実は王宮中庭に通じる隠し地下通路もあるのだが……まあエルキドゥの事だ、我が教えなくてもその内見つけてしまうだろう。
我の部屋を出て廊下を歩く。ハリウッドスターが通る様な、高級感のある赤い絨毯を踏みながら世界の美術館の結集体と化した廊下の展示物を横目にする。そうすると、エルキドゥが突然一つの前で足を止めた。

「コレってさ、さっき彼女が凄い見てたんだよね」

そう言ってエルキドゥが指差すのは、世界最古のテディベア「ベア55PB」。シュタイフ社で100年以上前に製造され、数あるテディベアの中の「原典」……なのだが力を持たないに等しい。
本物の熊宛らの毛並みと、メルヘン特有の無機質で美しい瞳。それらが組み合わさり、抱き締めたい衝動に駆られる程の愛くるしさを秘めている。

「もうさ、物凄く食い付いてたんだよ。食べちゃうんじゃないかって思うくらいに」

「ガン見か」
「バターケーキを前にした僕みたいにね」
「余程だな」

そうは言っても、別に我は男だし可愛い物に目が無いと言う訳では無い。一つくらいは女子どもウケを狙っておいてみただけなのだが。
別に絶対に欲しいと言う訳でも無い、乖離剣やヴィマーナなら兎も角この程度なら別に無くとも変わらんだろう。
そう思い、テディベアを展示するガラスケースを取り外し、中には代わりの肉形石を置いておいた。

「何だか優しいね、ギル」
「褒美を取らせる事を忘れていた。時には健気な雑種に蜜をやるのも一興よ」

テディベアを片手に、会話をしながら歩く。しかし道のりが長くて余りにも面倒なので、四階を降りた所で窓から中庭へと飛び降りてしまった。

「でもさ、ギル」
「どうした？エルキドゥ」
「その檜山が魔法を撃った。って言うのは証言だけで実証拠が何も無いんだよね？彼が『雫は嘘を吐いている！冤罪だ！』なんて言ったらどうしようも無いんじゃないかい？」
「ふっふっふ……エルキドゥよ、我はその程度も予期出来ぬほどの蒙昧では無いぞ」
王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）を開き、その中からマンホール程の大きさの石の円を引っ張り出す。我の両手を塞ぐ、直径約二メートルの石円の表面には、髭と髪が伸びに伸びた男が刻まれている。そして男の口は人が手を入れられる程の深さの穴がある。

大理石で出来ている為、重さは凡そ１２００ｋｇにも及ぶが、ギルガメッシュの筋力を持ってすれば１ｔくらいなら簡単に持つ事が出来た。

「ギル、コレは何だい？」

我が出した物に興味を示したのか、エルキドゥは石円の男を指でツンツンとしている。

この石像の名前は、「真実の口」

きっと地球でも知らない人の方が少ないだろう、それ程までにポピュラーな物の一つ。使い方は簡単で、この男の口に手を入れて何かを話してもらう。

一度嘘を吐けば手が抜けなくなり、二度嘘を吐けば骨が潰される。そして三度目に嘘を吐くと入れた手の手首ごと噛み切られてしまう。

地球のイタリア、ローマにも真実の口は置いてあるが、それは別に嘘をつこうとも手首を噛み千切られる可能性は極小だと思うので、別に気にしなくとも良いと思う。

「論より実証だ。エルキドゥ、手を口へ入れると良いぞ。」

「うん？どれどれ……」

エルキドゥはあっさりと手を真実の口へと入れた。一回だけであれば手が抜けなくなるだけで済むので、別に痛い思いはしないだろう。とは言え、手が抜けなくなる感覚はとても慣れない物だとは思うが。

「エルキドゥ、適当に何か虚偽を言うてみよ」

「んー……僕は朝ごはんを食べてない！」

「もう良いぞ、手を引き抜け」

「特に何も変わらなかったじゃないか……あれ？」

最初はエルキドゥは怪訝そうに眉を潜め、手を引き抜こうともう一度強く手を引いた。すると腕がピンと張り、エルキドゥの本体は急ブレーキを掛けた様に空で止まる。それを何回か繰り返せば、段々と焦った様な表情が顔に現れて来る。少し性格が悪いが、その様子が中々に奇抜で面白い。

しかし、エルキドゥからすれば焦りでいっぱいの様で、必死の形相で手を引き抜こうとしている。

「い、いま呼び覚ますは星の息吹……！」

「待て、我が悪かった」

地面に手を付いて詠唱を始めたエルキドゥ。しかし真実の口が壊されてしまうと後々困ってしまうので、中断しに入る。エルキドゥの目には漫画でよく見る様に、渦巻の様なグルグルマークが浮かんでいる。

真実の口から手を抜く方法は簡単で逆の事、つまりは本当の事を言えば良いだけだ。

「焦ったよ……一生手を石に突っ込んだまま生きて行くかと思った……」

「心外だな、我はお前に斯様な不義を為す訳無かろう」

「うん、僕もギルの事は信じてるよ。ちょっとビックリしちゃって」

ともあれ「真実の口」の威力はバッチリ証明出来た。１００％大理石で単体価値も高い物なので、エルキドゥに壊されたらたまらない。相当ポピュラーで知名度もあるので、宝具のランクとしては悪くないと思うが流石にエルキドゥからのマジ殴りに耐えられはしないだろう。

そんな一幕は有ったが、何とか真実の口を配置し、後は勇者達一行の到着を待つのみとなった。

「ん！・来たよ！」
「［気配感知］か、便利な物だな」

エルキドゥには技能として強い［気配感知］を持ち合わせている。ランクにして【Ａ＋】でこれは大地を通じて遠距離の気配を感知する事が出来る。また、同ランクまでの［気配遮断］系の技能を無効化するオマケ付きだ。かくれんぼ最強格、そして斥候力は他の者に引けを取る事は無いだろう。

エルキドゥのその言葉の通り、勇者達一行が中庭に来るのにはそこまで時間がかからなかった。

「良くぞ参ったな、不自由は無いか」

我の［カリスマ］スキルがきちんと作動している事を感じ、堂々と話す事を心がけながら３０人に余す事無く聞こえる様に程良い声を張る。勇者達の格好は日本の現代風では無い、ハイリヒに合わせた中世風の私服だ。鎧とかを着られれば少し厄介なので都合が良い。

「此度は二つ程、我の口から伝える事が有る。前フリは要らんな、本題に入るぞ。貴様等の現在の状況を省み、全員を戦闘要員として続ける事は厳しいと我は判断した。故にこれからは志願した者のみに訓練を課す。参加しない者も案ずるな、不条理に扱わず、生を保証する」
「それって……つまり……」
「戦わなくて良いって事⁉」

我の言葉に少し遅れて、勇者達の一部に歓声が沸き起こる。この反応を見るに、雫の言っていた事が本当だと強く分からせられる。そしてクラスから聞こえる「ギルガメッシュ王万歳！」の声……背を這いずる様な心地良さがあるな。癖になりそうだ。

だが、二個目の事は大分ショッキングだと我は思うのだ。少し嬉しそうにしている其処の檜山、糠喜びは地獄を見るぞ。

「二つ目の事だ。貴様等には些か厳しい話かもしれんが、心して聞け。南雲ハジメの事についてだ」

我がそう言うと、歓声はまるでボタンを押した電球のように一瞬で静まり返る。予想はしていたが、やはり関わりが薄かったとは言え同郷のクラスメイトの死は、思う所があるのだろう。そして檜山、分かりやすく動揺した様な焦った様な表情が軽く浮かんだな、これはほぼ確定で黒色か？

「貴様等は神から遣わされた者だ。我として、この件を調査をする事に決めた。そこで少しばかり聴聞を行う事とする」

「待って下さい！南雲が死んだのは事故です！」

「そ、そうだ！事故で死んだんだ！」

言葉に割り込んできたのは最早恒例の勇者、天之河光輝。それに便乗する様にして檜山までが声を上げた。自分が罰されない様にと必死だな。

ふと、雫の方を見てみれば申し訳ないと言う様に胸の前で合掌し、頭を軽く下げるジェスチャーをした。幼馴染が迷惑を掛けてすみません。と言った所だろうか。

「そうだな、事故かもしれん。だが事故だからと言って調査を行わなくて良い理由にはならんだろう。寧ろ、その事故の再発を防ぐ為に調査は必要だ」

「で、でも！」

「御託は良い、貴様等の時間をそう取らせる事は無い」

そして我は真実の口の説明をする。説明では「アーティファクト」と言う事にしておいた。勇者達が使っている鎧や剣はアーティファクトなので、そちらの方が信用され易いと踏んだからだ。

一行を列に並べて、一人一人に当たり障りの無い質問をしておく。しかしこれはどうでも良い。どうせ意味の無い事で、檜山以外にはそこまで期待をしていない。

そうして、檜山の番が回って来る。

……ハッキリ言おう。１００％此奴だ。

周りをキョロキョロと見渡したり、足をジタバタさせたりと、見れば落ち着いていない様子が簡単に分かる。首元には汗が浮かび、服の所々が汗汁で黒く湿っている。檜山は散々渋ったが、覚悟を決めたのか真実の口へと手を突っ込む。

「では質問をする。南雲ハジメの死に貴様は関わっているか？」

「いいえ！」

その途端、真実の口は檜山の手を捉えた。手を抜こうにも抜けなくなってしまう。

その事は、自分が南雲ハジメの死に関わっている事を意味している。

「我の前で欺瞞を為そう等、傲慢が過ぎるぞ、雑種。次に虚偽を述べれば貴様の手骨は粉々に砕ける。その上で述べよ。貴様は南雲ハジメの死に直接関わっているか？」

「いいえ！」

二度目の虚偽、それにより真実の口は容赦なく口を閉じる。一つ一つ、パキパキと耳に届く音こそが骨の砕ける音なのだと理解するが、その痛みはやはり相当な物だろう。檜山の口からは骨の砕ける音を帳消しにする程、五月蠅い叫びが張り上げられている。

これで殆ど確定した様な物だろう。しかし最後にそれを確定させるべく質問を続ける。

「では、最後の質問だ。南雲ハジメを殺したのは――貴様か？」

「は、はいぃ！はい！」

その途端、真実の口は開かれた。

引き抜かれた手は茶色く、萎びた様に薄い。手の骨を砕かれた為に薄くなったのだろう。息を荒らげながら、フラフラと立ち上がる。

檜山を見る視線は主に二つ。驚愕と、侮蔑だ。

南雲ハジメの死は事故だと疑わなかった者は前者を、そして後者を浮かべる者も少なくない。

「ひ、檜山……どうして……」

「動くなアァァ!!近付くんじゃねえよおおォ!!」

天之河が近付いた途端、檜山が突然声を張り上げる。萎びた片手を持つ腕で側に居た人物の首元を締め上げ、もう片手で【火球】の魔法陣を浮かび上がらせている。

もしかしなくとも、人質を取ったつもりなのだろう。クラスメイトからは男女関係なしに悲鳴が上がるが、女子の良く響く高音が空を裂き緊張感を生み出す。

「おい!!騒ぐな!!巫山戯やがっ……」

しかしな……檜山よ……

「性能を比べるんだね？分かるとも！」

我の親友を舐め過ぎだ。

緑の髪が戦ぐ、風の方へ。そして檜山の腕からその人物は切り取られた様に消えた。動揺した様に、檜山は辺りを見回す。右へ、左へ、しかし何処にもその人物は居ない。

途端、下の泥から鎖が現れる。

其れからは瞬く間の出来事だった。鎖の数は一つや二つで収まる

物では無い。幾十、幾百にも及ぶ波の様な鎖の応酬。瞬く間に檜山の体はすのこ巻にされ、虚空へと固定された。
鎖の発生源の泥塊が消え、再び緑の美しいヒトの姿を取る。一瞬前には生死を握られ人質になった、その事事態が無かった様に、人物(エルキドゥ)は自然体に美しく微笑んだのだった。

「我の前で欺瞞を働き、剰え我が親友に刃を向けたその不敬！死を持ってしても償えんぞ！最早、貴様の様な雑種にも及ばん塵屑は……生かしておく価値すら無い!!」

怒りと言う物が、此処まで制御の難しい物だとは思わなかった。頭に血が上る。良く使われる表現だが、正しく今の状態なのだと、心の底から判る。
これは、我が「ギルガメッシュ」だから怒っているのだろうか。
それとも、生まれ変わって尚、消える事の無い。封じ込めた「俺」の怒りなのだろうか。
……答えは解らない。俺は我になった筈だ。だったらこの怒りは「ギルガメッシュ」と「俺」両方の怒りなのだろう。
王の財宝が開く。この輩を葬るには何が良いか、何でも良い。剣を握らせろ。

「駄目だよギル。王さまが怒ったら、皆が怒っちゃうじゃないか」

ソレの声は美しかった。天使が謳う事が有るのであれば、きっとこんな声を上げるのだろうと、そう思う程に。
目に入ったのは、美しい緑の数千に及ぶ零細の線。その束。骨に堪える様な緑のにおい。
そして、無垢で無邪気なその顔(かんばせ)。
怒りが、波を引く音がした。

「……すまん、エルキドゥ。取り乱した」

「良いんだよ。僕も、君に同じ事があったら居ても立っても居られないさ」

軈て、騒ぎを聞き付けた宮の衛兵がやって来る。急激に冷却された頭は上手く動かず、エルキドゥが全てを説明してくれた。

我の頭が働きを取り戻した時、既に檜山は居なくなっていた。

「八重樫雫、褒美を渡していなかったな」

何とも言えぬ胸の気持ちを呑み込む様に、テディベアを押し付けて王宮内へと繋がる道を歩く。余りにも嫌な、何にも言い換えられない気分だったから、最後に聞こえた「人類最古のツンデレ……」と言う言葉は聞こえない事にした。

【幕間】奈落の底で

冷え切った体に追撃する様な微風。南雲ハジメの覚醒の原因はそれだった。

全身には絶え間なく痛みが走り、温かみの一つも持たない地面が余計に体に染みる。両腕の力を全力で使って起き上がるが、その時も両手に痛みが走って思わず背を強く打ち付けた。

「う……あ……！」

肺に残った呼吸の残りが呻き声で吐き出される。その痛みで急激に意識が巻き戻る感覚。臓腑の一つ一つに熱が灯って行く。

南雲ハジメが生存を果たした理由は、奇跡とも呼ぶべき確率の上に成り立っていた。橋の倒壊の後、本来であればノンストップで硬い地面と衝突し、生涯を閉じるのが普通だったがハジメは途轍もない強運を巻き起こしていた。それは水の吹出だった。意識を喪い落ちていく身からは感じ取れなかったものの、打ち出されて吹き出した水に背中を支えられ、脇道に流され続ける事で奇跡的に五体満足での生存を果たしている。

とは言え、それらの出来事はハジメの意識外で起きていた事、ハジメは自分の強運を理解しないまま思考を転換させる。

此処から帰るにはどうすべきか、此処は何階層なのか、そんな推量と予測で満たされた不確かな思考に割り込む様にハジメの片手に柔い感触が触れる。

地面は硬い、それらを形成する岩も石も。

じゃあ、一体この感触は何なのだ。一体これは……

視線が動いた、その先に在るモノにハジメは目を見開く。

「あ……あぁ……」

体を襲う恐怖感。そして少し遅れて訪れる吐き気。ソレは、ハジメ

にとって余りにも恐ろしく、心を揺さぶるモノだった。
それは、死体だった。
ハジメは、その体の持ち主を知っている。園部優花と言う女子だ。話した事はごく少しで、関心も決して多くは無い。それでも、知っていた。
死んだ。
ソレだけが事実としてある。自分の見知った人が、自分に関わった人が、こんなにあっさりと。
悲しいと言う感情はそこまで多く無かった。それ以上にハジメが覚えた罪悪感と言う感情は大きい物で、恐怖心を覆す程に膨れ上がる。
自分が遅かったから彼女は死んだのだと、ハジメはそれを疑わなかった。
他の者が聞けば「居た所で何も変わらない」と鼻で嗤うだろう。けれどハジメにはその思いを手に入れる事を自ら拒絶した。それを手にしてしまえば「無能」である事を正当化する事になる。

「ごめん……！本当に……ごめん！」

懺悔にも近い謝罪、それは機能を喪った躰の前で声が枯れるまで続いた。どうか、夢であって欲しいと強く願う。溢れて止まない涙と、自責だけが積もって行く。
結局、ハジメには今どうする事も出来ない。方角も行き先も判らない洞窟で、上へと戻って行くしかない今は。

「……錬成」

少し悩んだ後、ハジメは彼女の遺体の周りを［錬成］しドームの様にした。せめて、魔物が彼女の肉を貪る事の無い様に。
何時か、絶対に何時かは彼女の躰を持って帰る。そして地球で眠る様にしなければならない。誰かからそう言われた訳でも、命じられた

訳でも無い。それでもハジメは、それこそが自分に課せられた、生き残った自分の責務なのだと悟った。

それから、どれだけ歩いたのだろうか。

走っていた訳では無い。それなのに息切れを起こしそうな程、ハジメは歩いていた。

足を止めると言う考えは無い。前へ前へ、その前へと進む事だけが頭を支配していて、足の事など忘れきった様に歩き続けた。そうして行くと、遂に最初の分かれ道へと辿り着いた。

そこは四つに分かれた巨大な辻で、空気の音が絶え間なく四方から流れる。しかし、どの道が何処へと繋がっているのかをハジメは知らない。直感で選んだ最右の辻に足を踏み入れようと、躰を反転させた。その時、土煙が舞った。

僅か遅れて轟音が鳴り響く。

土煙が晴れるより前、訳は分からなかったが危機を感じたハジメは静かに岩陰へ身を潜めた。軈て、土煙が晴れる。その煙を起こしたのは何やら犬……狼と言うのが正しいのかもしれない。そんな生き物だった。そして、もう一匹の魔物が、狼と対峙する様に一つの辻から飛び上がり降り立つ。

「キュウ?」

その魔物は、ハジメの生きている地球では人畜無害なウサギだった。愛らしく可愛いと称されるに相応しい白銀の毛並みに小さな躰。唯一違う点と言えば、その体を支えるには肥大し過ぎた強靭な両脚。筋繊維が幾千と織り成されて形成されている巨大な脚の武器は、ウサギの評価を改めるのに十分過ぎる。

狼とウサギが睨み合う。

その構図を文だけで聞けば、苛烈な捕食者の狼からウサギが逃げる為に呼吸を計っていると思うだろう。しかし実状は違う。狼とウサ

ギは互いに等しく緊張を孕みながら相手を探っている様だった。その対峙は、捕食者と逃走者の一方的な一幕では無い。順序が存在しない故の対等な生存競争。

先に動いたのは狼だった。

前足を一つ持ち上げ、四肢で掛けたブーストの勢いままにウサギへ爪を突き刺そうと突貫する。四肢が掴んだ小石と土が舞った。そして、ウサギはその勢いある一撃を見切り、パンパンに詰まった筋を靭やかに揺らして空へ飛ぶ。ウサギのジャンプと言うのは、地球でも良く見る事だ。尤も、魔獣のウサギのジャンプは空を飛ぶ様な勢いなのだが。

一撃を躱された狼は、そのまま元ウサギが居た部分を通過する。「空振り」だと、ハジメがそう判断するが狼は勢いを止めず、洞窟の壁に疾走する。

もう一度、轟音が鳴った。

狼は洞窟の壁を蹴り、ウサギの体を今度こそ捉えたと言う様に牙を剥き出しに口を開く。研磨に研磨を重ねた刃物の様な牙が四つ。ウサギの首元へと突き刺さる……筈だった。

狼の視線からは、急激にウサギが視界から消えた様に見えていた。空中と言う場で、一度くらいの蹴りによる抵抗は覚悟していた。それなのに何一つとして訪れる感触は無い。狼からすれば謎が謎を呼ぶ所だが、岩陰から隠れ見ているハジメには、その全貌が良く見える。

空を足場にしたのだ。あのウサギは

虚空をまるで軟土の様に踏み締め、空へと躰を踊らせた。ハジメはそれを格闘ゲームの二段ジャンプに良く似ていると、そう心で思った。狼に空を足場にする能力は無い。法則に従い重力に縛られ、瞬く間に落下を始める。ウサギの落下も同じくして始まり、狼の脚が地に付くと同時にその頭蓋骨を踏み割った。

ベキャッと言う音が、虚しく小さく響く。狼は生命の持つ唯一の命令器官を停止させて絶命していた。ウサギは狼の動かぬ体を何する訳では無く、脚に付着した脳汁と血液の化合物を舌で舐め取る。体を丸め、ペロペロと小さな舌で足を舐める。その舐め取る足が血で染

まっていなければどれ程良かっただろうか。

（見つかったら終わる！）

魔物のレベルは明らかに２０階層所では無い。そもそもハジメの能力はギルガメッシュは愚か、勇者一行の一員にすら匹敵しない、極めて平凡な物なのだ。大迷宮の２０階層以降の魔物を単独で撃破する事など出来る道理は無いのだ。

ハジメの脳内では満場一致で「撤退」が可決されていた。こっそりと岩陰から引き返そうと、腰を低めて右足を前に出す。

「キュ？キュウ！」

ウサギの啼き声が背後から聞こえた、そして石を蹴る音。一瞬にして、ハジメの目の前にウサギが現れる。「バレたのか」一瞬ハジメはそう思ったが、ウサギはハジメの姿を軽く一瞥すると無関心な様にハジメの背後に広がる闇へと溶けて行く。

魔物は、例え草食であろうとヒトを襲う。理由は分からない。捕食の必要が無いのなら、容易な戦闘を引き起こすメリットは無いだろう。それでもまるでプログラミングされている様に、人を見つけ次第に危害を加えるのが常識的。では、魔物が人間（獲物）を無視するのはどういった時なのか。

それは、己の敵とすら呼べない。天上の強者から逃げる時。魔物がと言えど根底は生き物、自らの生存こそが最優先されるのである。つまり今、ハジメの前には圧倒的な脅力を誇るウサギ以上の魔物が居るのだ。

「[redacted]——！」

獣が一啼き、そして腕を一振り。その衝撃でハジメの盾となっていた岩は粉々に切り刻まれた。

岩が砕けた事で視界が拓け、ハジメの視界には灰黒の岩の中で白銀の熊は、静かにハジメを見据えている。２メートルを越そうと言う巨体に３０ｃｍ近い巨爪。

蛇に睨まれた蛙とでも言う様に、ハジメの体は熊に睨まれた途端に動く事が出来なくなってしまった。熊に死んだフリは効果的だと良く聞くが、果たしてそれは異世界にでも適用されるのだろうか。そんな諦めに近い現実逃避気味の思考でも、確実に時間は過ぎていく。

（ああ、死ぬんだな、僕）

熊の全身の筋が膨張する。そして間もなく地を蹴り爪を出す。それだけ、たったの数秒にも満たないその瞬間で、自身の命は刈り取られ、体の機能は停止する。

不思議と、死に赴く途中の時間は遅い。走馬灯と呼ばれる物なのかもしれない。生を終える前の一幕、それにハジメはされるがままにしていた。自分に携わった人々、父母への言い表せぬ罪悪と感謝の念。願わくば走馬灯でもその姿を――

ハジメの中に、生への終着は殆ど消えていた。ハジメの心は惜別の時を迎える、両親に会いたい。そうでなくとも顔を見たいと言う願いで沢山沢山だ。

その一心のまま、ハジメは走馬灯へ意識を全て注ぎ込んだ。両親の、親族の、友人の顔を最後に見る事が出来るかもしれない。そんな淡い希望を抱く。

走馬灯は悪夢だった。

ハジメの願っていた物は何一つとして無い。両親も、慈愛も、良い物はなんにも無い。其処は少し前に見たばっかりの地獄。悪意に悪意に溢れては止まない昏い感情の渦。

ベヒモス、檜山、そして熊。走馬灯にしては酷く偏った、生の最期に見て決して満足は出来ない光景。

「良いじゃないか、僕にしては良く生きたよ」

心の奥で、そんな声が聞こえる。

「無能でも、ベヒモスを倒したじゃないか。僕は良くやった、だから十分だよ」

――違う

僕はそんな事を思っていない。無能でも良く生きた？何だよそれ、無能じゃなきゃもっと生きられたのか？もしも僕が普通の天職だったら生きられたのか？そうだったら巫山戯るな。

「――くぅ…ッ！」

体は自然と動いていた。熊の長爪は脇腹を掠め、爪先が自分の血で赤く染まっている。口から苦渋に声が出るが痛みはそこまで酷い訳では無い。

――生きたい

ハジメに眼下に走馬灯は消えていた。その代わり、心境には力強い生への執着心が高速で生み出されている。熊は両脚に力を込め、頸の方向をハジメに合わせる。一度の攻撃を外した事で、僅かながらハジメへの警戒度を上げる。とは言えそれでも、ハジメは獲物であると言う認識は変わっていないが。

そんな熊の魔物とは真逆に、ハジメは熊を打ち倒すべき難敵だと認識した。自身の何十、もしかすると何百と強力な魔物だが、生きて帰る事を胸に決めた以上、負ける訳にはいかない。

「〝錬成〟!!」

自身が唯一行使可能な技能、錬成によって熊の立つ地から数十の棘が生える。しかし熊は棘が生えるより早くその場を脱した。大方、［魔力感知］の技能を持っているのだろう。

体には十分な魔力が残っている。きっと意識を失っている間に回復したのだろう……とは言え、元々多くない魔力だ。何時に無くなっても可笑しく無い。持久戦に持ち込まれれば間違いなく分が悪いのはハジメの方だ。かと言ってこの場で攻め急ぐと魔力切れで勝ち筋は失われる。

再び、熊はハジメに向けて突貫する。その動きはやはり異常に速い。ハジメは熊が動き出すと同時に左側へダイビングする様にして飛んだ。予めに取っておいた余裕のある回避行動、それにより寸前の所で避けきれる。そう思っていた。

「がっ……!?」

体に襲う激痛。耐えきれずに思わず膝を付く。攻撃は躱した筈、そう思い躰に目を向ければ、散り散りに割かれた服から三本の赤黒い線から血がとぷとぷと溢れ出している。

（魔法系の技能か！）

痛みの中、ハジメは即座に理解をした。熊は恐らく遠距離に働きかける攻撃系統の技能を持っている。

強靭な膂力に遠隔からの魔法。熊に弱点は無い様に、そう見えてしまう。それでもハジメから生への渇望が消える事は無い。痛みも、歪みも、消えないままでいる。

自分が熊に勝っている事は何か。膂力、魔力、技能、其れ等では何一つとして勝てる理は無い。けれど思考なら、どの様な生物より肥大した脳ならば、唯一有利に立つ事が出来る。

（考えろ……出来る事は絶対にある筈だ……！）

思考出来る時間は多くは無い。時間の猶予は熊の許すまで、たったそれだけの僅かな時間。この場で最も駄目なのは慌てる事だ。慌て

て逃げ出した所で優れた五感と俊敏であっという間に捕まってしまう。それに、逃げた先で熊より強い魔物とエンカウントする可能性すらある。

（大体！あのウサギも熊も強すぎだよ！この世界ってパワーバランス壊れてるんじゃないの!?）

不満１０割と言った様な思考でハジメは心でツッコミ気味に叫ぶ。

思えばだ。ベヒモスですらお腹いっぱいなのにそれ以上と思われるウサギに熊、極めつけにチートの代名詞と言わんばかりのギルガメッシュだ。パワーバランスのインフレが激しい。一昔前のバトル漫画かと疑ってしまう。

丁度その思考を終えた時、熊が再動を始めた。見飽きた様な三度目の爪撃。息の一つも切れた様子は見えず、変わりのない勢いでハジメに向かう。

十分にマージンを取れば回避、しかしその向こうで魔法の斬撃が待ち構えている。その布陣に、ハジメはバックステップで答えた。

（痛つっ……でも、それで良い――それが良い！）

肉が裂かれ、血が吹き出していく感覚。バックステップでの回避行動のお陰で出血は相当収まっているとは言え、その爪の刃はハジメ程度を斬るのに何の不自由も無い。

「――■■■■■!!」

熊は勢いを殺さずにハジメへと向かう。その両腕が高々と掲げられ、振り下ろされる――

「錬成」

直前、熊は盛大にハジメの眼下で膝を突いた。良かった、上手く行ったと、ハジメは心の中でガッツポーズを取る様な気持ちだった。

熊が突然、何故コケたのか。それは無論ハジメによる[錬成]だ。序盤に使った時こそ、熊の持つ[魔力感知]にて事前に回避されたものの、この二回目にハジメは確信めいた必中の予感を信じて疑わなかった。

熊は強い。それは覆し様の無い事実であり、弱点ですら格下のハジメには弱点に成り得ないだろう。しかし、熊には致命的な弱点がもう一つある。

それは慢心である。

慢心と言えど、何処その王とはベクトルが違う。この熊は洞窟内の生態系、その頂点に君臨する絶対的な捕食者だ。

それ故、洞窟内には居ない生き物の、ハジメの姿が見えない時こそ「風爪」で牽制をしたがハジメが取るに足らないと理解した時、風爪を使わなかった。

理由は単純、ハジメ以上の魔物に温存するため。

格下相手には合理的に戦う。野生には必要な判断の一つだが、今回はその弱点をハジメに看破されてしまったのだ。

「錬！成!!」

このチャンスを活かさない選択は無い。一瞬、時間にして須臾に等しい微弱な時。しかしその僅かな時間こそが、爪の直撃を食らってでも欲しかった時間。熊が起き上がるより速く、ハジメの錬成によって熊は両腕を貫かれ、起き上がれ無くなる。

時間は有る。今こそ、今でなければ、この熊は仕留められない――！

無我夢中。そう比喩するのに等しい我武者羅な動き。ハジメは握り締めた岩石を、無意識の内に歪な鈍ら剣へと変貌させていた。

――切る

その頸を、両腕を、両脚を。柄から切っ先までが石で出来たその剣

で。
切って切って切って切って、切り続けて。そしてその中で考える。
何故、自分ばかりこんな目に会うのか――弱いからだ。
何故、園部さんは死んだのか――自分が、弱いせいだ。
どうして、白崎さんとの誓いを守れなかったのか――俺が、無力だったからだ。
「無能」だから。心の何処かでそれが自分に枷をしている。弱くても、理不尽な目にあっても、「無能だから」で納得してきた。
でも、それは違う。答えは、僕が――俺が弱かったからだ。
「無能」に合った事を、「無能」でも出来る事をって思っていた。でもそれは間違っている。何もかもが間違っている。
喩え、無能であろうが勇者であろうが、そんな事は関係無い。弱者が勇気を持とうが、弱者が他人を慮ろうが、結局、其れ等は強い力の前では悉く捻じ伏せられてしまう。逆に、強者は慈愛も慈悲も必要はしない。己と向かい、己に負けぬ様に、自分自身に負ける訳には行かないと

『良いじゃないか、僕にしては良く生きたよ』

また、その声が聞こえる。弱い自分が、脆い自分が、そして何より醜い自分が。

「――おまえには負けない！誰かに負けるのはいい……けど、自分には負けられない――!!」

風化、酸化、刃毀れ、刃欠け。
剣は鉄ではない。鞘も無い。握りすら分かりはしない。

それでも――
それでも、きっと――

体は、剣でできていた。

【幕間】奈落の底で②

「……うわぁ……」

無我夢中から正気に戻った時、ハジメは思わず自分にドン引きしてしまった。

熊の魔物は真っ白な毛並みが血に汚れていない箇所は無い程出血していて、首の骨が右に左にとぐにゃぐにゃになっている。鉄臭いまでに血の臭いが充満していて、鼻が慣れるまでその生臭さに悶える様な気分だった。

「一応、食料だからな……でもどう食べれば良いんだ？」

獣を仕留めた際、血抜きをしなければならないと言う知識はある。しかしあるのは知識だけで、どうすれば良いのかは全く知らない。異世界の生き物の可食部も知らないし、毒があるのかすらも知らない。少し迷ったが、ハジメは取り敢えず出来る範囲で熊の解体を行う事にした。皮を剥いで、臓腑を取り出す。悪臭で鼻が折れそうだったが、必要な事だと自分に言い聞かせて熊を分解する。

暫くして、ハジメは2キロ程に切り分けたブロック肉を手に入れる事に成功した。他にも切り分けた肉はあるのだが、持てる量は限られているし長居していれば他の魔物が来るかもしれない。

「錬成！ふぅ……」

ハジメは［錬成］をして洞窟の窪みに入り、蓋をした。意味もなく壁にタックルする様な魔物が居ない限り、ハジメの居る場は安全圏になるだろう。

それにしても酷く疲れた。体に痛くない所は無いし、特に熊に裂かれた腹と歪な握りをしていた掌が酷い。熊との対峙中こそアドレナリンの分泌で気にしなかったが、落ち着いて一息をついている今、ア

ドレナリンの分泌は停滞しているだろう。それに加えての急激な運動による筋の痛み、魔力不足の頭痛。誰がどう見ても満身創痍である。

「水……そう言えば喉乾いたな」

ふと、ハジメの視界の端に、岩の隙間からから水がひたひたと溢れているのが見えた。それを見て、ハジメは自分に水分が不足している事を思い出す。迷宮に入り込んだ時には水筒を持っていた筈だが、いつの間にか落としてしまった様だ。少し休んでから水を飲もうと思ったが、一度喉の乾きを覚えると中々辛くて結局は水を飲みに壁際へ寄っていく。そして水の落下点に座り込み、口を大きく開けて水が口に入るのを待つ。

一滴一滴、少しずつ口に入る。そして、その一滴が口に入る度に心が和らぎ、体に活力が戻る。そして不思議な事に魔力すら回復した。

この水は普通の水ではない。

そう確信したハジメは岩の隙間を錬成でこじ開け、水源に向かってゆったりと歩き出す。錬成を何度も行ったが魔力が尽きる様子は無く、自分の思うがままに岩を動かして向かう。

水源は、一つの鉱石だった。バスケットボール程の青白い光を放つ鉱石で、イタリアの青の洞窟から一つ、石を取り出した様な美しい色をしている。

その鉱石の元から、一滴一滴と水は流れ、小さな水溜りが出来ているのだ。試しに口を付けてみれば、先程と同じ様な充足感が得られた。ハジメは錬成を駆使して鉱石を取り外し、それを砕いて程良い大きさにした。こうすれば回復作用のある水を少しずつ得られるからだ。

「そういや……もう1日近く飲まず食わずか。道理で腹が減る訳だな」

ふと思い出した様に口に出す。一日と数えられる訳でも無いし、昼夜の感覚も分からない奈落の底なのであくまで体感1日と言う訳なのだが、ハジメの体内時計は割と的を得ていた。

懐から先程の熊の肉を取り出し、そのまま一口齧る。血抜きもしていない野生の臭みや苦味、えぐ味が嫌と言う程口の中を走り、思わず吐き出しそうになってしまう。慌てて鼻を摘み、どうにかして口内の風味を誤魔化した。

「ぐっ!?――ッ!?あが……!」

その瞬間、何の前触れも無く全身に痛みが走る。繊維が、組織が、細胞が、一つ一つが侵食されて行く様な耐え難い痛み。全身の一片一片にその痛みは雷流の如くに流れ、自分の何もかもを壊している様にハジメは感じた。

(毒っぽいか?落ち着け……何とか……出来る筈だ……)

一先ずハジメは口内に残っていた肉塊を吐き出し、喉を通り過ぎた物も無理矢理嘔吐して吐き出した。しかしそれでも痛みが止む事は無い。

幸い、直ぐ側に回復作用のある水がある。ハジメはその場所まで痛みを堪えて這い、手で掬わずに直接大口を開けて水に噛み付く様に飲み込んだ。

「はぁ……はぁ……もう絶対に食わねえ……!」

全身に走る苦痛に顔を歪め、ハジメは誰にでも無く悪態をつく。

そもそも、魔物の肉は種類を問わず人間には総じて毒なのだがハイリヒに来て浅いハジメはそれを知らない。ただ分かりきった事はあの熊の肉は口にする物では無いと言う事。

奈落の底に陽は刺さない。今頃、日の目の見える外界ではどうなっ

ているかも分かりはしない。
昼夜も分からず、星も、月も、一寸の先も見える事は無い。
ハジメが運命と出会うのは、もう少しだけ先の話だ。

ハジメが居る奈落から遥か頂上、地上。
丁度ハジメが熊肉に当たり、髪を一部白化させた頃の話だ。
勇者一行が滞在している場所はハイリヒ王国でも屈指の高級宿、地球でも例えるなら一泊で6～7桁もの料金を取られる様な、そんな一地。
そこの一室に白崎香織は死んだように眠っていた。近づいて彼女の鼓動、もしくは呼吸音が聞こえなければ、多くの者はそれが完成された精巧な像と勘違いしてしまうだろう。それほどまでに美しく、静かに眠っている。

「――――！」
「香織？！聞こえる？！香織！」

覚醒、白崎香織の数日ぶりの目覚めは唯一無二の親友、八重樫雫に見守られた形となった。
自分の名前を懸命に呼ぶ親友、途切れ途切れで夢と現実の境界も曖昧な記憶。彼女の中でそれらは勝手に動き、勝手な憶測で結果を作り出す。

「うん、私だよ。雫ちゃん」
「香織……ああ、良かった……！」

数日間眠りっぱなしの体には何にも残っていなくて、八重樫の感激の抱擁を受け止める事は出来なかった。
記憶の最後に残るのは薄暗い洞窟の中、掠れに掠れた日差しだけが照らす闇の中。絶望の象徴とも言えるモンスター。

――――それに立ち向かう、一人の少年。
その記憶は、香織の中のもう一つの記憶と被って見えた。不良から小さな子どもを守った時と全く変わらない。彼の優しさだ。
「心配させてごめんね、雫ちゃん。みんなはどこ？南雲くんは？」
「っ……それは」

どう伝えれば良いのか、雫には理解が及ばなかった。親友の唯一にして無二の想い人、彼が既にこの世を去ってしまったと、どうして直接伝えられようか。
しかし、言い訳は通用しない。嘘なんて吐いたら真実を知った時のダメージが大きくなってしまうだけ。ただの未来に痛みを先送りしている事に変わりない。

「……嘘だよ、ね。そうでしょ？　雫ちゃん。私が気絶した後、南雲くんも助かったんだよね？」
「香織……違うの」
「やめて、離してよ。南雲くんにありがとうもごめんも言えてないの。だから、やめてよ」
「香織……分かってるでしょ？……もう駄目なの、もう駄目なのよ」
「違う！駄目じゃない！生きてる！南雲くんは生きてるの！生きてるのよお!!」

現実逃避、そう呼ぶのに相応しい思考だった。感情は抑えきれず、目の前にある酷な真実を受け止める事が出来ない。雫は同情する事が出来ない。誰かを一途に愛して、恋して、喪う一連の動きを過去に体験した訳ではない。だけれど、彼女が悲しく、苦しく、折れてしまいそうだと言う事は心から理解出来た。
同情は出来ない。だけれど憐れむ事は出来る。
雫は、暴れ回る親友を何時までも胸の中に留めさせていた。

「……悔しいわね」
「うん……」

誰よりも弱いと思っていた。そう思い込んでいた。
けれども見ただろうか、彼の勇姿を。己の持つ無力さを知りながらも、知恵と言う平等に与えられた武器で最善を尽くしたその功を。
力はきっと彼よりあった。守られるんじゃなくて守らなきゃいけなかった。
それだと言うのに――――彼は黙って立ち向かえるヒトだった。
物語の主人公(天之川光輝)にも馬鹿げた力(ギガメッシュ)の持ち主にも似通わない、普通の男の子。ただ、他人のためなら苦境の淵に立つ事が出来る。そんな人間性を持っていただけなのだ。

その後、香織の感情が落ち着くのにそれほど時間は必要とされなかった。
雫の他人(バ)を安心させる(ブ)人柄(み)なのか、はたまた香織の日常的な訓練(ストーキング)の賜物か、あるいはどちらにも該当しない何かなのか。それは香織のみが知る。

「〜☒〜〜☒」

そんな先程の悲しみや何にも言い難い怒りは何処へ行ったのか、寧ろ上機嫌と言わんばかりに香織は鼻歌を浮かべる。悲しみが消えた訳では無い。悲しみが薄れた訳でも無い。ただ、目の前にあるちょぴっとした良い事に一旦忘れる事にしただけ。
香織は今、大浴場へと足を運ぼうとしている途中だ。
数日間、タオルで体を濡らしたり汗を拭き取ったりはしてもらった物の、体を浸す様な入浴はしていない。そこで急遽、大浴場を使わせてもらう折になったのだ。

衣服を適当に投げ捨て、湯船までノンストップで向かう。
日頃はみんなが使うのでキチンと順序を守っていたが、貸し切り状態の今は気にしなくて良い。バスタオルも持たずに裸一貫で湯船に駆ける――――

「ん、来たか。漸くだな」

否、急ブレーキが採択された。
湯船には先客が居た。その事自体、既に可笑しな話だがその人物が男性であると言うのなら尚更。本来であれば公然わいせつで即座に逮捕、と言うのが流れだが香織には目前の光景を理解するのに時間を要した。
金細工の様な一本一本の存在感がある金髪に真紅の眼。そして体を覆う筋の束々。理想的な八頭身の体のこの持ち主は――――

「王様!!??」
「如何にも、我だが」
「如何にもじゃないですよね!?ここ、お風呂ですよ!?女湯ですよ!?」
「周知の事実だが」

会話が全く噛み合わない。通常、お風呂と言うのは性別によって入る場所は変わるもの。その認識は日本でもこの世界においても変わらない。互いの裸を堂々と晒す様な真似をする文化はどちらにもない。だと言うのにこの人物は、ギルガメッシュは威風堂々と裸体を晒し、剰え「見惚れても良いのだぞ?」とまで言ってくる始末。香織は目眩すら覚えた。

「せ、せめて隠して下さい……」
「何故だ?我に隠さねばならん部分などあるまい」
「下です!見てないからセーフですけど!早急にお願いします!」

香織の言葉に不服そうな態度を現したが、そうしなければ話は進まない。渋々と言った様子で下半身にタオルを巻き、浅い湯船に腰掛けた。

「この風呂は良いな、中々に良い材質で出来ておる。まあ我の純金風呂には敵わんが」

「あ、あのう……王様？」

「ん？何だ？まさか上も隠せと言う気か？」

「いやーそれ以前に……男の人はちょっと……」

おずおずとした香織の態度にギルガメッシュは怒る気は無い。根からの我様主義では無く、本来は型月をこよなく愛する元地球人。流石に目的はあれど自分のしている事は褒められた事では無いと言う自負はある。

「そうか、ではこれで問題はあるまいな？」

黄金の波紋が一つ、空に浮いた。おなじみの王の財宝だ。それに片手を突っ込んで何やら引っ掻き回していると、漸く目当ての物を掴んで取り出す。

それは、二錠の薬だった。それを躊躇い無く飲み込むと、ギルガメッシュの体から筋が幾分か抜け、髪が伸びる。そして胸元に豊かな二つの丘を作り出した。

「流石は吾だ、性が変わった所で美を妨げる理由にはならんな。うむ」

「えぇ……」

香織は絶句している。目の前の力強さ溢れる英雄の王が、妖艶さを醸し出す女帝へと変貌したのだから。驚きを通り越して呆れの感情が強かった。もう何でもアリだ、この王様。

「さて、なぜ吾が此処に居るか気になっている事であろう」
「は、はい」
「まあ貴様には伝えた方が良いかと思ってな、軽く予定の変更点を説明してやろう」

ギルガメッシュはそのまま香織に、戦闘への参加が志願制となった事、戦争参加継続のメンバーと離脱のメンバーなどと言った眠っていた間の事を聞かされる。数日とは言え、大きな動きがあった様だ。特に南雲殺しの犯人が判明し、処罰を待つ状況にあるというのは小さな喜びだ。

「で、だな。吾としては貴様には伝えておくべきかと思って来た。南雲ハジメの事だ」
「南雲くんは……きっと生きてます！」

ハジメの名前を出された事で、香織は咄嗟にそう答えてしまう。彼は死んだのだと言われるのは辛い。心のどこかで必死に戦っている二人の自分が居るのだ。現実を受け入れるべきという非情な自分と、希望を抱きたい自分。その自分が戦い続けていて、やっぱり後者の自分は優勢を築いているのだ。

「……少し話すがな、吾には未来が見える。尤も、そこまで便利では無い。吾が見る未来は確定しておらん未来、未来の選択肢と確率のみだ」
「未来……ですか？」
「左様、技能の一種だと思えば良い。吾の眼には起きる未来の分岐、そしてどの分岐が起きるかを見る事が出来る。南雲ハジメを行かせたのは、行かせた場合に貴様等の生還確率が上がるからだ」

滔々と、諭すわけでも無く事実だけを並べていく。彼……今は彼女だろうか、その人物が持つ未来を覗くと言う技能は強力無比と言って

も良いだろう。
　絶対がない状況で最良の道を選んだその選択は、きっと「間違い」では無いのだろう。しかし香織にとってはそれは最も嫌な選択だった。ハジメだけを喪って自分だけが生きると言う選択は。

「私は……！自分が生きてても南雲くんが死んじゃったら嫌なんです！可能性とか確率とか！そんなのじゃなくて南雲くんに死んで欲しく無くて……っ！」
「はぁ……傲慢だな、小娘。現に貴様等は南雲ハジメを除いた多くで生存を果たしておる。結果で言えば南雲ハジメが居なければ今の貴様等は居らんだろう。」
「分かってます！分かってますけど……！」

　そうだ、分かっている。自分が、クラスメイトが今も生きているのは間違いなくハジメのお陰だ。こればっかりは認めざるを得ない。それに、ギルガメッシュは冷酷であっても残虐では無い。未来を見通すと言う力を活かし、己の利と相手方への利を擦り合わせて選択をしているのだ。

「しかしな、可能性と言うのは便利な言葉だ。敢えて教えておこう。貴様等がベヒモスと遭遇する確率は南雲ハジメが生きているのと殆ど変わらん」
「南雲くんが生きて……」
「後は貴様の勝手だ、剣を置くも握るも貴様の好きにするが良い。後者の方が、吾には幾分が都合が良いがな」

　ギルガメッシュは再び黄金の波紋を浮かばせると、今度は琥珀色の酒を取り出して口に含む。未成年には届かないその慣れた流れが、どこか「大人の女」を思い浮かばせて関心するが、慌てて「そう言えば男だった」と思い出す。
　ハジメが生きている確率。それは大方、ベヒモスと遭遇する可能性

と殆ど変わらないと言った。その言葉に香織は剣を握り続ける事を既に決めている。決して高くない可能性だが、存在しない訳では無い。藁をも掴む思いで千切れなかった藁だって存在する。

そう意気揚々と意気込む香織だが、何日間も食事をしていない所為で

――――くうっとお腹が鳴りました。

この音にギルガメッシュの背筋が一瞬ビクッとしたのは少し違うお話。

後日、再び挑んだ迷宮でベヒモスと再遇し、香織がちょっと嬉しかったのもまた、後のお話だ。

奈落の化け物、或いは誰かの運命

――晴れ間を結う事は叶わない

既に分かりきった事実を突き付けられながら、意識は覚醒する。寝起き特有の気怠さも、微睡みの中の生温い感覚も、体の端々から襲う痛みで消えてしまう。朝と夜の分別も、概念も無い世界。その中に一つ、自分という体だけが残っている事を嫌という程実感する。

いっそのこと、寝ている間に何の痛みも苦しみも無く、消えてしまいたい。その願いを抱く度に己の弱さと無力感に襲われて苛々とする。

「行くか」

誰も、自分の声は聞いてくれない。誰も自分の事を気には掛けない。それでも自分自身に言い聞かせる、そのために小さく呟いた。

何階下がったか、何階上がったか、それすらも忘れたその中に

――僕(俺)が居る。

新たな階層、それから感じた事は恐怖に近い違和感だった。

既に１０を越える階層をたった孤りで踏破し、多くの異物を目にして尚、その空間からは細胞の一つ一つがヒリつく様な空気がする。

魔物は上の階層から見た物ばかりで何も変わらず、違和感の正体は判らない。魔物肉をちびちび齧りながら痛みに喘ぐ何も変わらない日々。そんな日の中だった。

それは、もしかすると余りにも不気味だった。

何の変哲も無い。何も舗装されていないありふれた脇道を曲がった先、そこは、不気味と言う他無かった。

高さ三メートル程の荘厳な扉に、それ以上の大きさを誇る巨大な石像が二組。もしも地上ならば古代の建造物として、美しさを覚えたかもしれない。しかしそれらは光を持たない奈落によって、明るいイ

メージを一つ残らず剥奪されていた。

「……ああ、行ってやるさ」

足を踏み入れる。そうする事は見た時から決めていた。喩え不気味でも、喩えそれが苦難の道だとしても、これは数十階の中でやっと現れた〝変化〟なのだ。これに縋らない訳には行かない。しかし、それと同じくらいに何かしらの災厄が訪れるという確信も持ち合わせている。

「――――っ……！」

像が色彩を得る。体の中央から、円に広がる様に薄く、濃く、冷たく、熱く、細胞の一つ一つに染み込む様に色が付いていく。

その肖像は像をまるっきり色付けした物だと言える。一つだけの目に筋骨隆々とした巨体。それが連なる山の様にハジメの目の前に立ちはだかる。

「悪いな、あんまり長引かせるつもりは無いんだ」

技能『風爪』

それはハジメを大きく奮起させたあの熊の魔物の技能だった。それが熊とは似ても似つかないハジメが放つ。巨人から見ればさぞかし奇怪な光景だったに違いない。

しかし、巨人達はその光景を認識するより前に斃れてしまったので、その異常性に何を思い、何を伝える訳でも無く命を枯らした。

ハジメがその技能を得た事に気が付いたのは、彼が熊肉で体を壊した後の事だった。不思議な事に、自分が食べた相手の技能が自身に備わっていたのだが、この『風爪』はかなりの万能を誇る性能で、ハジメの生み出す錬成物にも纏わせる事が出来る。なのでハジメの戦闘の幅は言わずもがな大幅に引き上げられたのだ。

「……さて、鬼が出るか蛇が出るか、はたまた仏が出て来るか……だな」

二体の巨人像が体内に隠し持っていた鍵を片手にハジメは扉へと歩み寄る。一歩、二歩、５メートル、１０メートル……

そして――扉が開く。

――月を見た

扉が開いた瞬間、ハジメはそう信じて疑わなかった。訳も分からないが今、自分は奈落の底から月を見たのだと、そう確信して疑わなかった。

奈落、何一つとして光の無い地の底。何度願ったかは判らない、何度祈ったかも数えていない。それは、月。

ハジメは泣いていた。それは圧倒的な美しさに呑まれたのか、もしくは願いを辿った希望を目にしたなのか、それは本人にすら判らなかった。

「……だれ？」

掠れた、音が空を揺らす。

声は高い。喉に何度も掠れて擦り切れた女性、女子の声。

その時にして漸く、ハジメは己が見ていた物が月では無いと理解した。

「人……？」

ハジメは思わず呟く。月だと信じ込んでいたそれ、下半身は巨大な人口岩に埋め込まれ、上半身と両手、そして顔のみが見える。顔には髪が垂れ下がっており、顔を見る事は出来ない。しかしその月と錯覚するまでの金髪が、美しいという確信を持たせる。

「人……だよな？」
「……お願い……！助けて……！」

ハジメの問いは無視された。ハジメの問いを掻き消したのは必死な願いだった。
髪が持ち上がり、彼女の素顔が晒される。その顔は確信の中にある美しさと全く同じ、ビスクドールに良く似た比類ない美しさ。目に見える幼さは、それらに圧倒され、塗り潰されている。

「助けるって……」
「お願い……本当に……私……」

ポロポロと彼女の岩から水滴が落ちる。涙だ。
両腕を岩に拘束されている為、その涙は拭う事が出来ない。ただ重力の働くがままに水は球形となって垂れ落ちるのみ。
ハジメの中にあるのは疑心、そして同情だった。
誰も立ち入らない様にこの様な場所に幽閉され、門番までも用意される。そんな存在への疑い、そして同情。
助けるか助けないか。その二択はハジメに一任され、それは正しく心境に宿る2つのハジメの戦いだった。
奈落に封じられる程の力に、恐怖を覚えた。
奈落に封じ込められたその年月に、哀れみを覚えた。
あっさりと助けられない自分に、少し嫌悪した。

「違うの…私、裏切られただけで……」

その一言は、ハジメの同情を優勢にする程の威力があった。
信じていた物、それに裏切られる。きっと、その心は表せる程簡単な物では無いだろう。現にハジメがそうなのだから。

「……ちょっとだけ待っててくれ」

もし、彼女が迷宮の罠の一部だったら？
もし、彼女が助けた所で自分に牙を剥く化け物だったら？
もし、彼女を助けた先に――何も残らないとしたら？
そんな考えは無かった。そうとは言い切れない。確かに疑惑は完全には拭えない、一日も過ぎていない相手に全てを預ける気にはなれない。
ただ、可哀想だと思ったのだ。光も彩もないその瞳が、余りにも哀れで、余りにも心が痛くて。
助けたいと、心からそう思ったのだ。

「――錬成」

瞬間、両掌から離れていく魔力の感覚。止まないその循環は、まるで吸い取られているのかと錯覚する程に激しく、多い。ハジメもここまで多量の魔力を流し込んで尚、形一つ変えないのは初めての経験だった。鉄や鉱石では無い。何十という異物を混ぜ合わせた人工的な混合物。
――ここが正念場だ、堪えるぞ。
声には出さない。それは自分に言い聞かせるのみ。形一つ変えない石塊に意識を一滴残らず敷き詰める。
錬成の感覚と言うのは、高熱の粘土を練るのと良く似ている。しかし今回は硬すぎて、ガラスを割る様に力を込める。
罅が一つ。たった一つだけ刻まれる。だがその罅はハジメにとっての突破口、割れるという確信を強め、ハジメは両手の魔力を一層強めた。

「……！」

岩に閉じ込められた少女の表情が明るくなる。内部からの拘束も弱まっている事を示している様だ。しかし、ハジメの関心はその方に

全く傾く事は無い。世の多くの男は魅了されるその僅かな笑みも、ハジメの脳内には一片たりとも入り込む余地は無い。

「痛つっ……！」

ハジメの意識がやっと引き戻される、そのトリガーは両掌の痛み。もしもこの痛みが無ければ。ハジメは永遠に戻って来る事は無かったのではないか、そう錯覚するまでの深い集中だった。両手からは赤黒い血がどくどくと溢れ出ている。魔力を長時間、大量に流した事で内側から皮膚が溢れ出てしまったのだろう。

「んっ……」

剥き出しになった皮膚に、靭やかな筋の塊が這う。数百と備わった味蕾が皮膚を刺激し、微妙な痛覚が起こる。その筋は彼女の舌だった。

「……っ!?」

「あ……」

理解が及ぶと同時に、手を勢い良く引っ込める。手に走った異質な違和感が消えない。思わず舌の触れた手を片方で抑え、その舌を這わせた持ち主に視線を向ける。

「んむぅ……」

金髪の彼女、彼女はハジメが手を引っ込めた事を名残惜しそうに頬を膨らませた。冷たさを覚えるその顔が、なんともまあ抜けた、温かい表情を浮かべる。ハジメはそれを見て、まるで顔の内側の水分を沸騰させられた様な気分になる。

頬を膨らませる美少女と真顔に徹する少年。その間から会話は無

く、ただ目を合わせる時間が延々と続く。

「……名前、なに？」

「何って、そういや何も言って無かったな」

思わずハジメは苦笑する。思えばなんと浅はかだった。名前すらも知らない彼女を、何の意味も、何の義務でも無く助けてしまったのだ。

結果的な話をすれば、彼女に敵意は無い様に見える。言ってしまえば自分は彼女の封印を放った途端、殺される危険すら有ったのだ。

「ハジメ、南雲ハジメって言うんだ。君は？」

それでも、助けて良かったと思ってしまうのは、きっと甘えなのだろう。同じクラスの彼女、園部さんに白崎さん。その二人への贖罪の意思は生への執着へと変わっている。だと言うのに、結局他人は他人と割り切る事が出来ていない。

――ああ、これを甘さと言わずに何と言うのだろうか。

「……名前、付けて」

「え？」

「……もう前の名前はいらない。ハジメが付けて、ハジメのがいい」

予想外だった。十と数年、生きてきたが名前を聞いて「付けて」と言われるのは初めてだ。突然の事に思わず口籠るが、少し考えれば彼女の思考も理解出来た。きっと、それは自分と良く似た理由なのだろう。

前の封印されていた〝自分〟を捨て、新しい〝自分〟になりたい。だからその変化を求めているのだ。形が違うとは言え、変化を願っていたのは自分も同じ、ハジメは拒む事をしない。

「って言ってもなあ……俺、ネーミングセンス無いし……」

頭を傾け、頬をカリカリと掻く。ハジメの脳内では様々な外国系の名前が浮かんでは却下を繰り返している。瞳を強く閉じ、前頭葉から何か良い物はないかと記憶へのアクセスを試みる。しかし出て来る物は挙って採用へと辿り着かない。目を軽く開ければ女の子の期待が刺さる。

「そうだ、ユエなんてどうだ？」

「ユエ？」

「そうそう、ここじゃない国だとな、月をそんな風に言うんだ。……なんか安直だけどさ、その髪が月みたいで」

月をユエと発音するのは確か中国だった様な気がする。父か母かは判らないが、何方かの仕事を手伝った時に調べでもしたのだろう。自分の中ではかなり納得出来る物だと思うのだが、女の子の方は……

「ユエ……ユエ……うん、私は今日からユエ。ありがとう」

彼女はどうやら気に召した様だ。数回復唱すると、受け入れた様に強く一回頷いた。その行動は変に見た目相応で可笑しな気持ちになる。それと同じくして、自分は彼女が何者なのかが酷く気になった。そしてその疑問が口をついて出そうになった時、ハジメの視界にはユエの姿が映る。

「……ハジメ？何、これ」

ハジメは無言で自分の羽織っていた毛皮をユエに巻いた。

彼女は全裸であった。

「……ハジメのエッチ」

無音の薄闇に声が小さく反響する。
ハジメは結局、掛ける言葉を見つける事が出来なかった。